

文部省檢定
大正三十一年一月七日

5a
810
大12



師範學校

吉田彌平編

國文教科書

本科用

東京 光風館藏版

卷一

教科書
51
200

42598

教科書文庫

4
810
51-1924
20000
65471

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

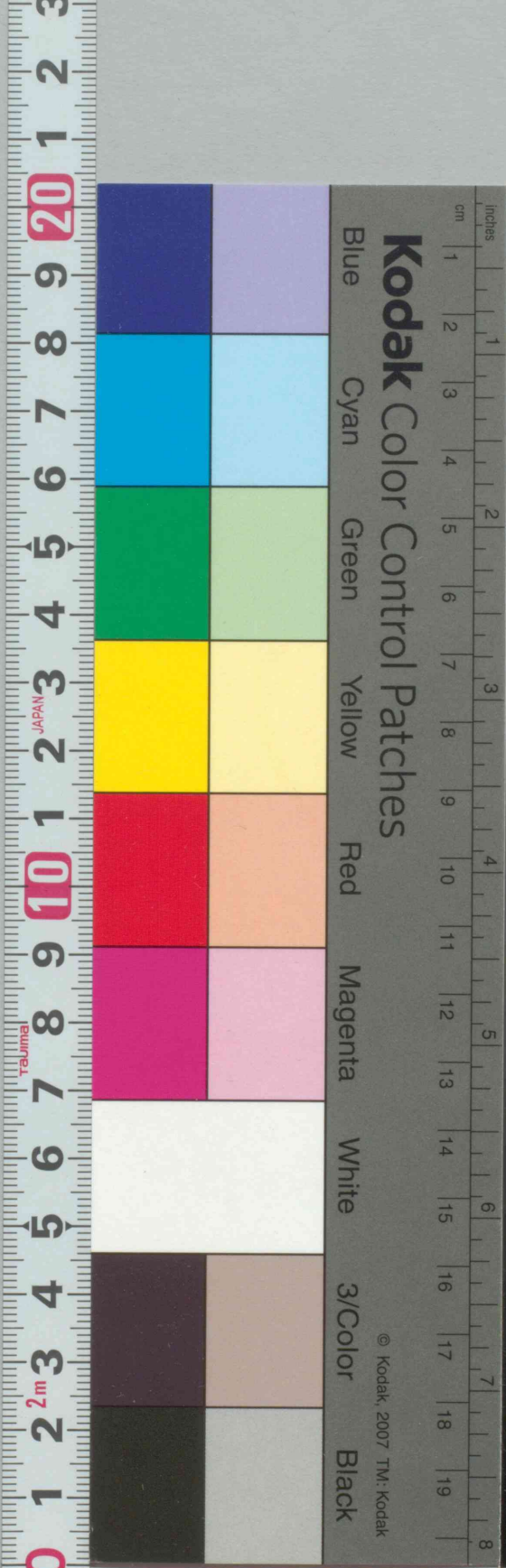


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫

4

810

51-1924

2000065471

濟定檢省部文

書科教科語國校學範師 日七月一年三十正大

師範學校

國文教科書

吉田彌平編

本科用

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000065471



52
810
大12

東京 大風齋發行

學林 國文叢書

言日語平假



緒言

本書は師範學校第一本科の國語科講讀用教科書として編纂したもので、今回第七次の修正を加へたのであります。本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯として編みあげました。

趣味の豊かなもの、描寫の巧なもの、感激に満ちたもの、暗示に富めるもの、なるべくさういふ材料を探りました。

高學年に於て國文學史の大要を知らせるやうな仕組にしました。國語・國字に關する知識が必ずしも講讀の教材として適當なものではないやうに思はれます。それらは多少の系統を立て、各卷の附録に

緒言

しました。

表記法は國定小學讀本を標準にしました。

各章の題目の下には作家の氏名又は氏號を記し、文の終りには出所を示しました。編纂の都合で、原文の姿のかはつて來たものは只據る所を記すことにしました。

原作に對しては十分の敬意を表して居りながら、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならぬことのありましたのは、甚だ不本意であります。が、本書の性質上、已むを得ないこととして諸家の寛恕を請ふ次第であります。

大正十二年十月

師範學校 國文教科書 本科用卷一

目次

一	明治神宮	藤岡作太郎	二
二	平安京	德田秋江	七
三	伊吹山	夏目漱石	三
四	峠の茶屋	藤井紫影	二
五	戦争と平和	山縣有朋	三
六	帝國の青年に	近衛文磨	四
七	平和條約成る		

目次

一

八	オリンピヤの回顧	黑板勝美	四
九	豊臣太閤の文事	三上參次	五
一〇	ポチその一	長谷川二葉亭	六
一一	ポチその二	長谷川二葉亭	七
一二	敵艦見ゆ	水野廣徳	七
一三	元寇その一	三宅雪嶺	九
一四	元寇その二	三宅雪嶺	九
一五	鳥居勝商	湯淺常山	一〇
一六	村の六月	徳富健次郎	一〇
一七	金華山に遊ぶ	大町桂月	一〇
一八	鷹山公と平洲	嘉納治五郎	一七

一九	花咲翁	武者小路實篤	一一
二〇	門生に示す	室鳩巢	一一
二一	傑作	綱島梁川	一一
二二	水精の玉	幸田露伴	一一
二三	田園の夏	杉村楚人冠	一一
二四	故郷	正岡子規	一一
二五	ロイド、ジョージその一	河上肇	一二
二六	ロイド、ジョージその二	河上肇	一二
二七	岩崎谷	徳富健次郎	一二
二八	雨の夜	樋口一葉	一二
二九	佛法僧	高濱虚子	一二

三〇	山の樹	志賀直哉	一七九
三一	非凡なる凡人その一	國木獨歩	一八九
三二	非凡なる凡人その二	國木田獨歩	二〇一

附 録

第一篇 假名

一	假名の起原	一
二	片假名	三
三	平假名	六

師範
學校
國文教科書本科用卷一

一 明治神宮

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた太陽の光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにはつて來る新しい檜の香をかきながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

代々木の森
東京市の西郊
代々幡町大字
代々木にある
森林。
私
本文の作者溝
口白羊。

或時は、無数の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多数の人夫が汗みどろになりながら、えい／＼聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或刺戟を感じると同時に、生みの親の墓に對する様な強い懐かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。



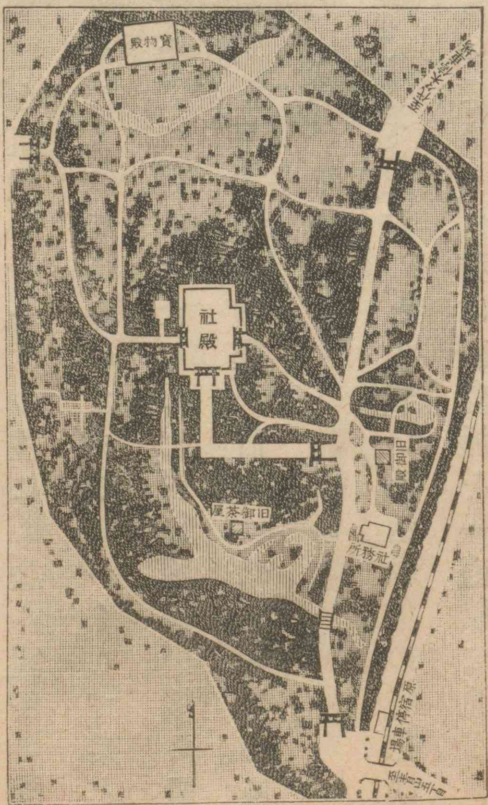
明治神宮

かつて赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾つもの間に、鋭く尖つた切石が幾つもの間に、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見渡された御料地は、いつの間、にやら、すっかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴

と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに、其の改つた光景を見て強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高

く超越して隠れた處に働いた強い力がなければならぬ。明治天皇の御聖徳と昭憲皇太后の御懿徳と、そして此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の感謝の至情と、此の三つのものこそ此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である。嗚呼、至純な動機から出た青年團の造營奉仕、百里二百里の



明治神宮平面圖

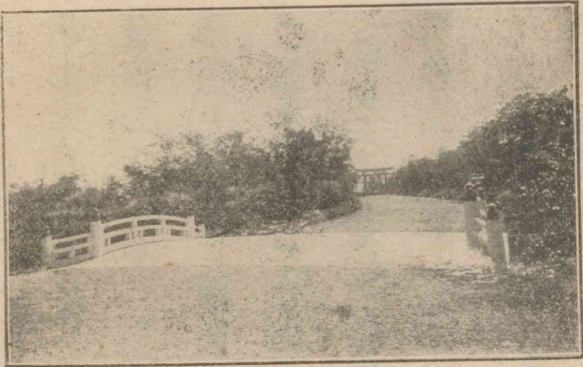
遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の御靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一歩々々、美しい小砂

利の上を、神殿に近く踏入るに随つて、愈、肅然たる心持にな

つて、深く襟を搔合せた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに随つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。花崗石の勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を成した風致の好い



明治神宮神橋

細流の兩岸、自然石の配置された處に、數十株の楓がその影

をせよらぎの水の面に落してゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に千七百四十の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。

此の鳥居の在る處は南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷から來て居る幅員六間の北參道との

原宿

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町

原宿

千駄ヶ谷

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町

千駄ヶ谷

土佐繪

土佐權守春日經隆の創めたる畫の一派。

接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で、右を見ると、ばつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭亭として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合せて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されな

何事の
西行法師が伊勢神宮に参拜したるときに詠みたる歌なりといふ。

い神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねども、

かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は黙禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周囲から来る鈍い光波の中に、静寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを展開して見せてゐる。然も、それでゐて、決して淺露な心持はせずに、却て一層深く大きくされた静寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下

げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺えるのだ。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した神宮だといふことが出来る、私はさう思つた。(「明治神宮記」に據る)

二 平安京

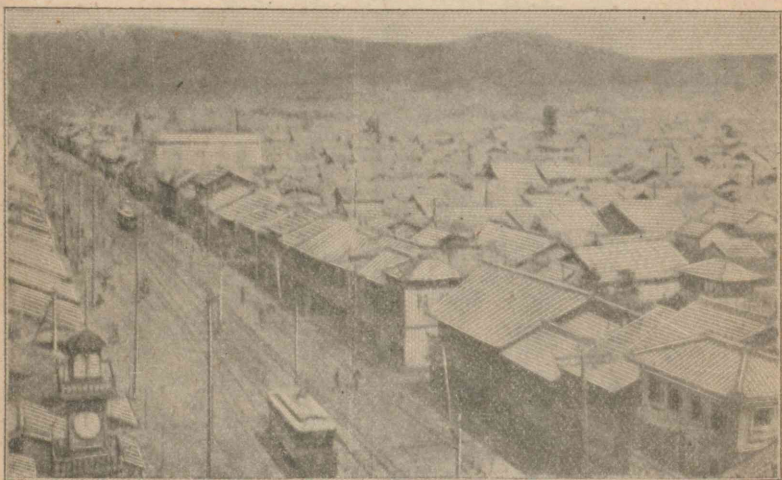
藤岡作太郎

藤岡作太郎
號は東園。
國文學者。
文學博士。
東京帝國大學
文科大學助教
授。
明治四十三年
歿、年四十一

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往くところとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、嘩麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、

四明が嶽
比叡山の頂。

北には鞍馬・貴船・永室・鷹が峰・高尾の山々波濤の如く、西にや
や隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は
窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の
入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面
の草の頂たる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わ
けて朝日・夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。
東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の
如く近く相並びてあらねば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子
の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬところから。
南にや、隔りて男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮
柱太知りまして、仰ぐも畏し。



京 四 部 條 通 見 り た 東 山

京の東端に沿うて鴨河の
流糺の河合に高野の支流
を集めて、南に珠を碎き去
り、西に少し離れて桂川、大
堰の激湍に清瀧を併せて
琴の音涼しく又南に向ふ。
二河南に合し、更に淀の急
流に流れ込みて、沈々とし
て西の方難波をさして走
る。

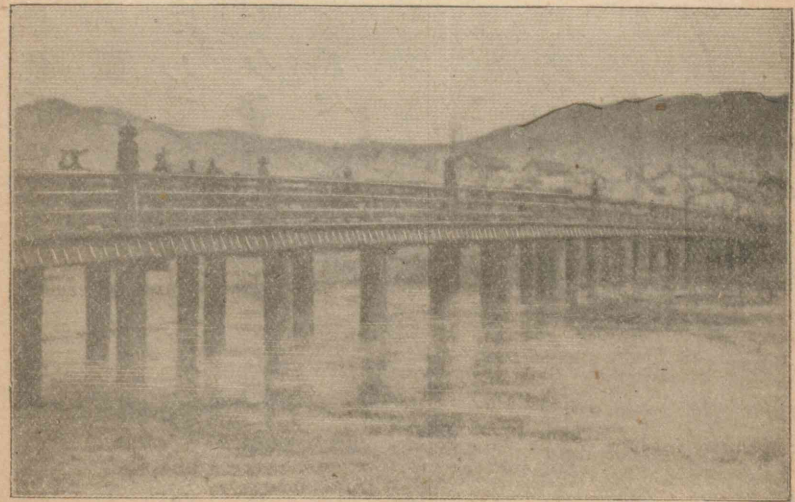
茫洋たる大海浩蕩たる波

濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるものなしといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の礦物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして、清き京都は益その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界はたゞ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて、凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留の中、遂に京

都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な夕な^{あさなゆふな}の景色は、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ一つ彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寐たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は墨



京 都 三 條 大 橋

繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまつ朝靄を漏れ來る。

時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちには、らはらと面を撲つ、あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。(國文學全史)

三 伊 吹 山

德 田 秋 江

「あゝ、伊吹山が見える。」と私は思はず獨語した。

德田秋江
名は浩司。
文學者。
明治九年生。

山の空
けつきり春
雨後の
夏
連関

すると、傍に横臥して居た骨董屋はむつくと起き上りつゝ、窓に顔を向けて、

「あゝ、これが伊吹山ですか。」と言葉をかけた。

「えゝ、伊吹山です。 好い山だ。」私は感嘆の聲を放つた。

さういふうちにも、山の全身が車窓に向つて、満幅の繪畫を展開して來た。

「なるほど、これが伊吹山ですか。 よく伊吹といふことを

聞いてゐたが、今はじめて見る。」

「好い山だ。 今日はいつになく不思議にはつきりと見える。」

私は重ねて感嘆の聲を發した。 全く今日ぐらゐる伊吹山を

よく見たことは、二十年の間幾度となく此處を往復して居ながら始めてゝあつた。

伊吹山。 何といふ記憶に懐かしい山であらう。 私の幼年

時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは常に日本の歴史とそれに關聯せる地理とにあつた。 私がこの伊吹山

を覚えそめたのは、平治の亂に一敗地に塗れた源義朝が義

平・朝長・頼朝の三子を連れ、纔かに鎌田政家等二三の家子に

擁せられて東國を指して落ちゆく途中、雪の爲に父子相失

ひ、今年やうやく十三になつたばかりの頼朝が唯一人關ヶ

原あたりをさまよふ處を尾張守頼盛が家人彌平兵衛宗清

に捕へられて六波羅の屋敷へ引いて行かれた條で、それが

どんなに私の哀感をぞつたことであらう。私はそれをよく記憶して居て、自分が十九の年始めて上京するときには、汽車の窓からこの伊吹山を眺めることを忘れなかつた。都を離れ失意の心を懷いて北國に落ち行く人、或は東山道を経て遠き奥州のはてに歸る人、逢坂の關を越えて湖水のあなたに比良比叡の山々を遠く顧みがちに近江路を行く間は、まだ後ろにしてゆく都の名残も、六工惚ばれた。一度不破の關を過ぎてしまへば、都は愈々雲井の空に遠ざかるばかりである。知らず古來幾人かこの山麓を過ぐるものが、憂愁に充てる眼を擧げて山頂の雲を眺めたであらう。或年は晩秋初冬のころ私はこゝを通つた。それは遠い外

國に行つて居て亡くなつた兄を弔ふために歸國して再び東國に歸る時であつた。雪模様の灰色の雲は低く垂れて黄褐色にうら枯れた伊吹山は、憂鬱な空の表にはつきりと浮び出でて居た。また或年は夏のをはりの時分こゝを通つた。その時私は中央線によつて名古屋に出で、漸く日の暮れそめるころ、濃尾の平野を通つて行くと、名古屋あたりから蒸すやうに暑かつた空は、一面に墨を流したやうに搔曇つて千頃、青田にはもの／＼しい嵐がさつと波を揚げた。と思ふ間に、大粒の雨滴は早くも横さまに車窓を打つて來た。風はますます強く吹いて、やがて銀箭の如き急雨は沛然としてやつて來た。その篠つく雨の音の中を列車

は轟々と響をあげて駛つて行つた。そして大垣を過ぎる頃には、さしもの豪雨もいつしか止んで、沿道の草木は眞青に洗ひ清めたやうな濡れ色を見せて、雨氣を含んだ温かな風が開け放つた窓を流れるやうに吹いた。その時車窓の遙かあなたに伊吹山の雄姿を認めた。その方の空にはまだ降り足らぬやうな凄じい夕立雲が黒く鎖して、漆を流したやうな嶮しい伊吹山は夕暗の中に人を脅しさうに聳え立つて居た。私はその雨後の伊吹山をも忘れることが出来ぬ。

今日はまた珍しく春の日の光の中に、氣象の加減で稍距離を置いて淡藍色に染めなされて明媚な姿を示して居る。

「好い山だ。うん、繪の通りだ。すつかり繪になつて居る。」骨董屋もしきりに感嘆して眺めて居る。列車はその山麓をめぐり、やがて次第に西北の遠い霞の中に山を残して過ぎさつた。

私はその山の姿が見えなくなるまで長く目送して居た。

(車窓)

四 峠の茶屋

叙景文

夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに、庇から吊されて、

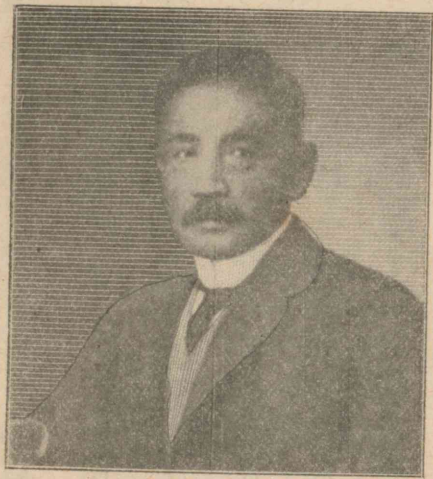
夏目漱石
名は金之助。
英文學者、
小説家。
大正五年歿す
年五十。

屈託氣にふらりくと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。「おい」とまた聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある白の上にくれて居た雞が驚いて眼をさます。「くゝゝ、くゝゝ」と騒ぎ出す。敷居の外に土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこ」と云ふと、雌が

細い聲で「けゝつこつこ」と云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には一升程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはと



夏目漱石

ぐろを捲いた線香が日の移るの知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさざりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えて

ある菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店をあけ放しても苦にならないと見える處が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で嘸御困りでござんしよ。おゝおゝ、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かす

よ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつくと二聲で雞を追下げる。「ここゝゝ」と駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來に飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられて居る。

「御菓子を。」と今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。

余は懐から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈のうちがばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嗚御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙

が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。(漱石全集)

五 戦争と平和

藤井紫影

はるかに響く砲の音

間遠になりて日は暮れぬ

悪戦苦闘のひねもすに

饑ゑ疲れたる獨逸兵

戦友五六打群れて

逃げ後れたる佛蘭西の

片山陰の寒村の

埴生の小屋を見出して

「出せ、食物、疾く、早く、

麵包やある、麵包。」と促せば

有るか無きの息の下、

「あらず、あらず。」と繰返す

聲のあるじを物蔭に

求めたどれば、しかすがに

藤井紫影
名は乙男。
國文學者。
文學博士。
京都帝國大學
教授。
明治元年生。

やせおとろへし母親の 髪もおどろに色蒼く
 物におびゆるまなざしの 後にかこふ五人の
 子供は十を頭に 末はやうく、這ふばかり、
 「餓えしは我らのみならず、 茲にも仲間のありけるよ、
 いで一走り、何物か あなぐり來ん」と外に出でぬ。
 齋しかへる胡蘿蔔の 色は肉にも似かよひて
 やがて血潮と涌きぬへし。 「火おこせ、疾く」とせきたて、
 「水よ、鹽よ」とひしめきつ、 湯氣にのぼりし甘き香を
 咽を鳴して待ちにけり、
 赤く盛りたる大皿を めぐりて集ふ兵卒の
 足下ちかく「爺々」とよぶ 小きき聲にふと見れば

八寒地獄
八寒地獄の隣
 にあり、寒苦
 に堪へざる處
 といふ。

山縣有朋
樞密院議長。
 元帥。公爵。
 大正十一年薨
 年八十五。
 この書は大正
 七年時の山口
 縣知事林市藏
 に贈れるもの
 なり。

まなこ窪みし幼児の 母を離れて這ひよれり。
 あとの四人もつきくに 制する母の手をぬけて
 兵士の群に入りまじり、 膝にのぼりつ、肩に攀ち、
 あるじまうけの大方は、 小きき客につくされぬ。
 屍山血河の修羅の區、 八寒地獄のたゞなかに
 春風わたる神の國、 嘻嘻の笑は山を拆く
 巨砲の音に打勝ちて、 暫しやはらく人心
 骨身ものびたる時しもあれ、 忽ち聞ゆ進軍の令。

(中等國文讀本)

六 帝國の青年に

山縣有朋

田中參謀次
長
陸軍大將田中
義一。
前陸軍大臣
文久三年一二
五二三生。

謹啓時下益々清適慶賀此事、存候
陳者先般田中參謀次長貴管下地方、旅
行相成候由、近日面會の節種々近状並
貴下御盡瘁の模様をも承及び候殊々青
年團、関しても一方御配意の趣、老生
に於ても乍薩喜居候次第にて尚此上共
一層の御盡力を希望致候申す迄も無足
今次の歐洲大戦争終了の後は、全世界に亘
り精神上物質上非常なる変化を来し
我が帝國に於ても直接間接に其の影

響を被らばきは明白の事に有之、右に就い
ても將來帝國を擔ひて立つべき青年に
は確乎たる決心と覚悟とを要すべく今日
より豫め指導鍛錬する要は、今更々言
を要す間敷候

今次大戦の原因は種々可有之、修へども
要するに國民民族の競争の結果に外な
らざる、而して此の競争が今次の大戦に依り
中欧の天地に於て解決を告ぐるや否と
に拘らず、次に起るべき競争は必ず東亞の

地を中心と致すべきは避く可からざる必
至の情勢と被存候尚之を想像するに其
の競争は政治上經濟上種々の形式を以
て顕れ勢の赴く處國難を醸成する迄
に立至るものと覺悟せざる可らざる儀と
存候幸に今次の大戦に當りては帝國は
遠く交戦の地域を離れ直接の害毒を
被ること少しと雖も戦後の競争に關して
は直接に波瀾を被り此の間若し一步を
誤らば邦家千載の悔と可相成實に不

容易時期と相考へられ候

近世帝國が列強と交渉を有するに至
りたる以来五六十年間の事を追懐する
に非常なる難局に遭遇せし事一再な
らざる今日より之を想ふたに尚心膽の寒
きを覚ゆる事も有る此の間に處し幸
に難局を披き國運の伸張を見たるは
殆ど天祐とも申すべく上に千古の聖帝
を仰ぎ下志誠の國民あり幾多の賢
宰相良將籌謀宜しきを待相俟つて

此に至りたるは勿論ながら又當時帝國は列強の間に伍し其の地位必ずしも今日の如く重要ならざりしにも因るは然るに今日に至りては帝國の事實上諸列強と伍を同じくするに至りたるのみならず今後列強が東亞の天地に覇を争ふに當りては帝國は彼等に取りては重大なる競争者として又當路の大障害なれば事に當りて困難を感ずる度も昔日に比し幾層倍するは明かならざる候高

木風に當るの喻の如く帝國の地位は戦後に起るべき大颶風の衝に當る高樓とも申すべく基礎棟梁は勿論障礙子の末に至るまで寸分の弛無きと非ざれば能く此の大風を凌ぎて全きを保つこと能はざるを想へば日夜枕々憂に堪へざる次第に有る候此の來るべき狂風怒濤の日に帝國の運命を託するものは實に帝國青年の外他にあるべからず候如御承知今日に於て國運の進展は一

二宰相の指導にのみ依るべからず又單に陸海の兵力にのみ頼るべからず國民を拳げ國力を盡し所謂上下一統舉國一致の力に倚らざらべからず精神上將た物質上各種の方面に青年努力の要は益々重大に有之候此の意義に於て老生は各地に青年團の設置せらるる修養に従ふを喜ぶと共に又益々改善進歩して真に國家に資する所あらんことを希ふ次第に有之候

貴下恰も此の時勢に際し牧民の官として指導誘掖の事に當られ熱心從事せらるる哉聞き欣喜の情に堪へず偏に成果を擧げられん事を切望致候是實に老生が帝國の前途の爲己み難き宿願に有之候老生齡既に六十歳を超え今後帝國の爲に盡す餘命幾何も無し唯々將來ある青年に帝國の前途を依頼するの外喜之老生の真意而推察被下度候

草々

近衛文麿

公爵。

講和全權委員

隨員。

明治二十四年

生。

六月二十八

日

大正八年。

ヴェルサイユ宮

佛國巴里の西

南十一哩ヴェ

ルサイユ市に

ある宮殿。

ルイ十四世の

建てたるもの。

世界第一の華

麗なる宮殿と

稱せらる。

七 平和條約成る

近衛文麿

六月二十八日、朝來暖煙輕く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列ビーブラ、フランセーを唱へて旗を振りつゝ市中を練り歩き、自動車自動車の如きも、亦思ひ／＼に装を凝らしたり。憶へば過去五箇年の間、砲彈の音に敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事も幾度ぞ。今や乾坤一轉して、和氣藹然たり。巴里人の今日の喜や實に想察するに餘りありといふべし。

此の日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は帚目正しく掃き清められ

て一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。兩側に

堵列せる共和衛兵の銀色の兜と白き鹿革の袴下と黒く光

れる長靴とは、光彩陸離として莊重なる此の日の儀式をい

やが上にも莊重ならしめたり。午後三時、各國全權委員は

皆己に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦處

狭きまでに詰込みて、さしにも廣き鏡の間も、些の餘地だに

なかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控

ふる事として、流石に咳一つ聞えず、滿場靜まり返れり。

見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央にはク

レマンソー氏例の如く椅子に深く腰をおろし、向つて左に

はウイルソン大統領を始めとして米國委員、次に伊太利委

クレマンソン
 當時の佛國首相。
 ウイルソン
 當時の米國大統領。

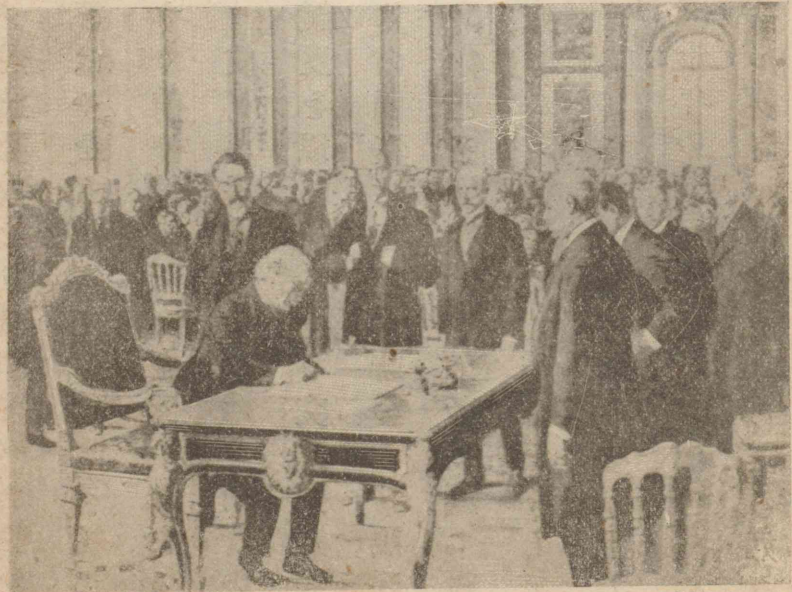
ロイド、ジョージ
英國の首相。

員、次に白耳義委員あり、又ク氏の向つて右にはロイド、ジョージ氏を始めとして、英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本の委員、西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。何れも黒のフロックコート姿にて、華麗眼をそばだてしむるものとしては、一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、其の背後には、特に今日に限り庭園まで入るを許されし幾千の人々堵の如く並びて、調印の終るを今や遅しと待ち構へたり。

午後三時を過ぐるごと五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時に其の方に注がるゝや、やがて二名の獨逸委員は幾

多の佛國將校に見守られつゝ、入場し來れり。先なるは新外相ミユラー氏にして、後に續けるはヘル氏なり。何れもフロックコートを着し、稍俯向き勝に極めて物靜かなる態度を持しつ。つ日本委員の隣なる定めの席に着けり。

席定まるや、クレマンソ



平和條約調印の光景

ウイリヤム
老帝
獨逸の英主。
(1797-1889)
ビスマルク
獨逸の大政治家。
(1815-1898)
モルトケ
獨逸の名將。
(1800-1891)

一氏は徐ろに起ちて、先づ獨逸委員より調印すべき旨を告ぐ。茲に於て獨逸委員等はやをら起ち上り、案内せらるゝ儘に、クレマンソー氏のすぐ前、條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み交る交る條約の正文に署名したり。其の間僅に二三分時のみ。嗚呼幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犠牲として漸く贏ち得たる最後の結果はかくの如きか。獨逸の運命はかくして定まり了んぬ。見よ自席に歸り行く二人の黒き姿の淋しくも憐なるを。之を彼の五十年の昔同じ此の大廣間に於て、ウイリヤム老帝がビスマルク・モルトケを始め雲の如き賢

臣名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらんや。

獨逸委員の座に復するや、ウイilson氏先づ座を立ち、續いて四名の米國委員之に従ひ、同じ卓子に至りて署名せり。次にはロイド、ジョージ氏を先登として英本國委員、次に英植民地委員、次に佛國委員、次に伊太利委員、次に日本委員の順序にて、各一團づつ代るゝ。其の卓子に於て署名し、かくて最後のウルグアイ委員に至る迄、時を費すこと四十三分調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由として之に加らざりし支那を除き、凡て二十

山東問題

日本が獨逸の租借權を繼承して經營せる山東省の青島を支那に還附するについての問題。

六個國調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。
 是に於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも
船軍に、後、簡單に宣言して曰く「平和は今や成れり」と。此の時世界に
 類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊
音ハセマツに迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は宮殿の内外に蝟集せ
 る幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現
 を祝しぬ。
 (戰後歐米見聞録)

ハ オリンピヤの回顧

黑板勝美

古コリントの廢墟に遊んで登臨の快を恣にしたる余は、一
 夜の夢を淋しき客棧に結び、翌くる朝汽車に搭じてオリン

黑板勝美

史學者。

文學博士。

東京帝國大學

教授。

明治七年生。

オリンピヤ
 希臘の南部ペ
 ロポネス、牛
 島の西北部な
 る一小村。
 コリント
 古のペロポネ
 スの首府に
 て牛島の東北
 部に在り。

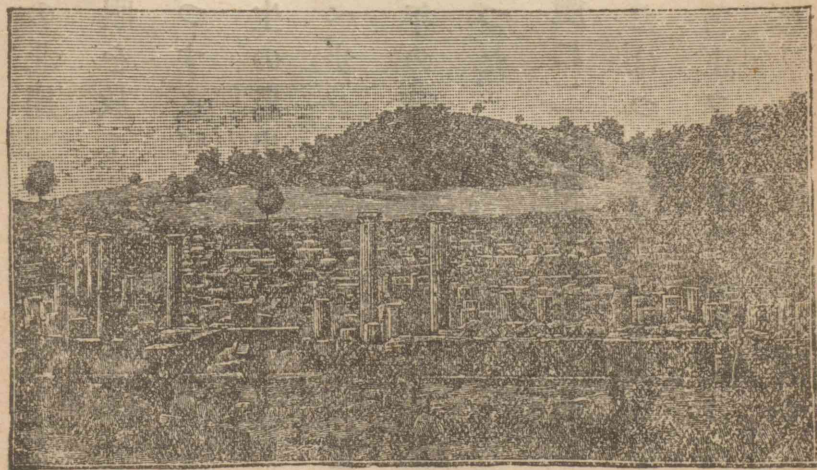
クロニオン
 オリンピヤの
 遺址の東北に
 ある小丘。
 フィヂヤス
 希臘の彫刻
 家。
 前(450? - 42?)

ピヤに向つた。ペロポネス、の北岸、碧波綠樹の間を縫つ
 て西に走りつゝ、車窓に凭つて眼を放てば、オリーブの森茂
 れるあたり、舊道の見えつ隠れつするに、古希臘の勇士がそ
 の市その市の名譽を負うて、一生の思出にオリンピヤの大
 競技會へ馳せ參ぜん、と、駒を並べ、サンダル踏みしめて急げ
 る様も胸中に描かれ、身は二千年の昔に生れたらん心地し
 て、覺えず肉躍り骨鳴るのであつた。

クロニオン丘青葉茂る處、その麓に二川の合流するあたり、
 オリンピヤの廢墟は永久に横たはつて居る。中央なるゼ
 ウス神殿、大ギムナシウムの址、名工フィヂヤスがゼウス神
 像を鑄た處など、獨逸人の非常な精力によつて發掘された

跡、一々指點すべく、その掘出した彫刻遺物は、はるか此方の博物館に手際よく陳列されて居る。

オリンピヤのゼウス神はパンヘレニツクの神、希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加、西は伊太利、東は小亞細亞、苟も希臘人の住んで居る處なら、幾千萬の人々が此處に集ひ來つた



墟廢場技競ヤリンリオ

のである。此の廢墟の奥に一部分のみ發掘された競技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦蔓が高く茂りあつて、羅馬時代に建てた凱旋門の半ば壞れて居るのに纏はるのが、如何にも名譽の月桂冠でもあるやうに見える。

大競技は四年に一度の大祭日に催された。此の日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人々が敵味方を忘れてこれに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピヤの競技によつて出來たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にこゝに集り來り、各州の選手が雲を呼び風を起し、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に且目覺しかつ

ヘロドツス
(前481-424年)
デモステネス
(前383-321年)
テミストクレス
(前530-460年)

たであらう。
集つて来た人々の中には詩人もあつたであらう、學者もあつたであらう、ヘロドツスの如き歴史家も、デモステネスの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政治家、法律家、富めるも貧しきも、名門も平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人々が互に顔を合せ、談笑周旋この間を徘徊したる様の、如何に面白く且賑やかであつたであらう。
若し此處に名工があつたなら、彼の靈腕は此の群集によつて得るところがなかつたであらうか。また文學家があつたなら、彼の椽大なる筆は此の群集によつて得るところがなかつたであらうか。想ふに此の競技は、單に競技そのも

の、進歩を來したのみではない。哲學、歴史、戯曲、音樂、彫刻などの發達に影響したことも蓋し鮮少ではなかつたであらう。

この祭には市場が立つことになつて居た。物資の交換、賣買が如何に全國の商業、農業を益したことであらうか。かくて思想、知識の交換、延いては感情の融和が國民の一致に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。彼等はペルシャ戦争に於て國民的敵愾心の絶頂に達した。小忿を忘れて大敵に當りよく東方の強を挫くことが出来たのは、このオリンピヤの競技に負ふところが少くないと思ふ。

ペルシャ戦争

波斯希臘間の戦争。前五〇四年より同四九年まで數回の激戦あり、終に希臘の勝に歸す。

しかもその競技は決して職業的ではなかつた。選手は皆各州から送られた青年であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は、此の競技のはや衰へ始めた日であつた。言ひ換へれば、此の競技は全國民をして眞の勇者たらしむるにあつたのである。そして全國民の體格と意志との發達は、此の競技に依つて益促進せられたのである。古代希臘に於ける教育のモットーは一言にして盡さる、曰く「健全なる肉體に健全なる精神宿る」と。只此の健全なる精神を養成せんがために、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻には此の意味が現れて居る。希臘の文學にも此の意味が見えて居る。

オリンピヤの祭典は、かくて希臘の歴史始つて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は希臘の文化と共に永久に亡びることがないであらう。近頃歐洲に此の競技が復興され、極東にさへ其の開設を見るに至つたのも、亦世界の文化を進め、國際の平和を維持せんとする古代希臘の精神の復興に外ならぬのである。我が國に於ても單獨にもこのオリンピヤ競技の様なものを催すがよからうと思ふ。我が固有の劍道、柔道より駈走、水泳、相撲、さてはボート、ベースボール、フットボール等に至るまで、各階級を通じ、各地方に亙り、舉つてその選手を出して、壯快なる競技をなさしめ、觀覽者も全國各地より雲集す

る一のスツデイオンを設けるのは、盛世の一美舉ではなからうか。余のオリンピヤに遊ぶや、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草藜々たる競技場を徘徊して、古希臘の文化の淵源の茲に存することに想到した時、覺えず一種の希望を起した。それは、我が國民の擧つて崇敬し奉る伊勢神宮に一大スツデイオンを設け、一定の日を以て全國民の競技を演ぜしめよ。といふ事であつた。(歐米文明記)

九 豊臣太閤の文事

三上參次

從來、豊太閤の人物、事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記等の書にして、三國志、漢楚軍談などと共に普

三上參次
史學者。
文學博士。
東京帝國大學
文科大學教
授。
慶應元年(二
五二五)生。

く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたるが如く、間、又、いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲なる人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

磨けば益、光り、鑽れば彌堅し。眞に偉大なる人物は仔細に研究するに従ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太

閣は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に、舊大名たりし華族の諸家、古社寺舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一、大村法橋由己、楠長、諸正虎等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書、其の大部分を占めた



豐 臣 秀 吉 (伊紀國高野山慶院藏)

りとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙、短冊、消息の類も亦少なしとせず。西に東に遠征せる先より母なる大政所、夫人

なる淺野氏、若しくは、一子秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉、秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢てする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中、自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醒の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の

江村專齋
豐臣時代より
徳川初期の儒
學。
寛文四年(三
) 歿す年二月。

筆蹟

早々と松浦人
お越し候事満
足にて候そも
じより禮申候
べく候定めて
松浦子を拾ひ
候て早々と申
こし候間即ち
子の名は拾子
と可申候
(文祿二年八
月三日秀頼
大阪城に生
る松浦とい
ふ者急ぎ秀
吉に注進せ
しを喜び夫
人淺野氏に
寄せたる文
の一節な
り。ひろひ
子は、頼の
幼名なり。)

簡易を喜び、敏捷を尙
びしをいへるにて、少
しも漢字を知らざり
しをいへるにはあら
ず。
軍陣にての消息など
は、咄嗟に文章を成し
たるにて、字句の鍛錬
なしといへども、天真
爛漫辭簡にして意達
し、少しも凝滞する所

えやくとまゝ
おつとつとまゝ
まてとつとまゝ
れいじつとまゝ
てまゝとつとまゝ
とまゝとつとまゝ
とまゝとつとまゝ
とまゝとつとまゝ

(威寺臺高都京) 廣 筆 吉 秀 臣 豊

なし。而して、その間に溢るゝばかりの愛情あらはれ趣味
の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年、小田原在陣の中
に、母に寄せたる書の中に「そもじさま御ゆさん候て、きをも
なぐさみ、わか御なり候て可給候。たのみ申候」の語あり。
千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり
給はれ」の一語より適切なるものはあらじ。又その政所淺
野氏への書の中には「ねんごろに文給はり、御げんざんのご
ころしてねんごろにみり」ことし内には「ひまあけ可參
候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目に
かゝり、つもる御物がたり可申候。等の句あるなり。祐筆の
手に成りたる文書の中にも、かしここゝに太閤の口授にか

かれりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り撥亂反正の功を奏するには、多少かかる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。正親町帝之を聞しめし、やがて、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜

ひしかば、太閤感謝に堪へず、即ち

忍びつゝ霞とともにながめしも

あらはれけりな花の木のもと

と返歌を上られき。又天正十六年の事なりけり、北山に狩

して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりける

に、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちらりと降り來

りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は

花をおそしとさそひ來ぬらん

と詠まれき。逸興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉

野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

龍安寺
山城國葛野郡
花園村に在
り。細川政元
創立。

吉野山たれとむるとはなけれども、

今宵も花のかげにやどらん。

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相の

かねこそ花の恨なりけれ。

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なかくに雅趣に富み格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐のときには和歌浦・玉津島にて、小田原陣の折には清見瀉にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のとき

紀州征伐

天正十三年根來寺を討つ。
小田原陣
天正十七年北條氏を討つ。
聚樂第
京都市の西北昔の大内裡のあとに當る。

醍醐

山城國宇治郡醍醐。
大佛
洛東方廣寺。
豐臣秀吉創建。
横槩賦詩
魏の曹操の故事。

は、勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては、古英雄の横槩賦詩の面影を想はしむ。而して、功成り名遂げたる此の千古の偉人にも、亦無常を感じたる事のありてや、

露とちり雫ときゆる世の中に、
何とのこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あはれにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、

なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに、太閤は伊達政宗

細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうち
の錚々たる者なりしなり。

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして予
が原本を目撃したるものゝみにても、二三十はあるならん
加之、太閤は時には、學者をして往事を談せしめて之を聽き、
又、禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足
るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。

(豊太閤に關する研究)

長谷川二葉
亭

名は辰之助。
文學者。
新聞記者。
明治四十二年
歿す、年四十
八

10 ポチその一

長谷川二葉亭

私は元來動物ずきで、別して犬は大好だから、近所の犬は大

抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼く
のは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中
から首を出す

「どうしたの。寐られないのかえ。」

と、母が寐反りを打つてこちらを向いた。私は此の返答は
差措いて、

「あれは白ちやないねえ、阿母さん。もつと小さい狗の聲
だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つてなあに。」

「棄狗つて……誰かゝ棄て、いつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄てゝいつたと、私は二三度反覆して見たが、分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、其の意味を説明してくれて、「もう晚いから黙つてお寐。」と優しく言つて、又あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の軒が又蒼蠅く耳に附く。寐られぬ儘

に、私は夜着の中で今聽いた母の説明を繰返し繰返し味つて見た。

まづどこかの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちひさなむくくしたのが重なり合つて首を擡げて、みいくと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んでべろと舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころくと轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よちくと這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽へてちうと吸附いて、小さな兩手で揉立て揉立て吸出すと、甘い温かな乳汁がどくくと出て來て、咽喉

へ流れ込み、胸を下つて、何とも言はずおいしい。と腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面びつで割込んで来る。奪られまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒を行つてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを探ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹もよくなり、親の肌で身體も温まつて融けさうな好い心持になり、ついうとくとなると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にも狼狽へて又吸附いで、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうとくとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。

其の時忽ち暗やみからもちやくと毛の生えた節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる處を無手と引摺み宙に吊す。驚いて目をぼつちり明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたと見えて眞暗になる。窮屈で息氣が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻掻いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、領元を抓まれて、高い高い處からどさりと落された。うろくとして其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、おそろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くんと親を呼んで見るが何處からも出て來ない。途方に暮れてよちく

と這出し、雨の夜中を唯ひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私がか居た、まらないうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無さうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見なくても好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて……あらあんなに啼いてる……。」

と折柄絶入るやうに啼入る狗の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう、よう。」

「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ、母も澁々起きて、雪洞を點けて立上つたから、私も其の後について、玄關と云つてもついで次の間だが、玄關へ出た。

一一 ポチ その二

長谷川二葉亭

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、からりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら／＼と靡く。

其の時小さな鞠のやうなものがつと軒下を飛退いたやうだつたが、聽て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黒を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照し出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も経たぬ、むく／＼と太つた赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾をちぎれさうに掉立て、此方を瞻上げてゐる。體は私が寝てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぼつちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや／＼まあ可愛らしう。」

と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好だ。ちつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

と、左程怖れた様子もなく、ちよ／＼と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐい／＼推上げるやうにして、べろ／＼と舐廻し手をくれる積りなのか、頻に圓い前足を舉げてはたく／＼やつてゐたが、果はやんわりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くてたまらない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん何か遣つて。」

「遣るも好いけど居附いてしまふと仕方がないねえ。」
と口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。早速履脱へ引入れて之をあてがふと、狗兒は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づびちやくと舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくしんと小さな嚏をする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟も無いのに、しきりに小言を言ひながらがつくと喫べ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事では中々取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今夜一晚泊めて遣つてと雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿父さんに叱られるけれど言ひながら、詰り棧俵法師を捜して來て、履脱の隅に敷いて遣つた。それは好かつたが、其の晩一晚啼通されて私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌の父は泊めた其の夜を啼明されてしまふとうんざりしてしまつて、翌くる日は是非逐出すと言ひ出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが併しそれも一時の事で、その中に小

狗も獨寝に慣れて夜も啼かなくなる。と、逐出す筈のものに、いつしかボチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

父がかうなつたのも無論ボチを愛したからではない。唯私にひかされたのだ。私とてもボチを手放し得なかつたのは、強ちボチを愛したからではない。愛す、愛さんはさしておいて、私は唯かあいさうだつたのだ。親の乳房に縋つて居る處を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された狗の兒の運命が子供心にも果敢なく情ないやうに思はれて手放すに忍びなかつたのだ。

この忍びぬ心とその忍びぬ心を破るに忍びぬ心と二つの

忍びぬ心の搦み合つた處に、ボチは旨く引懸つて、辛くも棒石ころの危ない浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれど、ともかくも雨露を凌ぐに足る縁の下の菰の上で、旨くはなくとも朝夕二度の汗懸飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと育つた。

育つにつれて、まるくと太つてかあいらしがつたのが、身長に幅をとられて、ひよろ長くなり、而もひどくと身がきすになつて、一寸狐のやうな犬になつてしまつた。前脚を突張つて、尻をもつたて、弓のやうに反つて伸をしながら大きな口をあめぐりあいて、欠をする處などは、誰が眼にも餘り見つともよくなかつたから、父は始終「いやな犬だ」「いやな犬だ」

と言つて私をいやがらせたが私はそんなことで愛をさますやうな心は聊かも無い。いやな犬だと言はれるほどなほかあゆい。

「ねえ阿母さん、こんな犬は何處へ行つたつて、かあいがいられやしないねえ。だから内にかあいがつてやるんだねえ。」

といつても苦笑する母を無理に味方にして、からかふ父と争つた。

犬好は犬が知る。私のこの心はポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には犬嫌の父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行つてしま

ふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて、眼を輝かして飛んで來る。而して母の手中にそれらしい物があれば兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし唯それだけの事で、その時のポチはやつぱり犬に違ひない。

その矢張犬に違ひないポチが私に對ふと、犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか。どつちだかそれは分らないが、とにかく互の情愛に人畜の差別を撥無して、渾然として一如となるのである。(平凡)

水野廣徳
海軍大佐

一二 敵艦見ゆ

水野廣徳

露國第二艦隊
 明治三十八年三月十六日マダガスカルを發し五月五日第三艦隊と安南に會合す。司令長官ロジエストウキンスキー中將。

東郷海軍大將
 東郷平八郎。今元帥。伯耆。弘化四年(二五〇七)生。

顧みれば、露國第二艦隊マダガスカルを發せりとの飛報に接し、春尙寒き三月の中旬、故國の山を霞に残しつゝ、我が聯合艦隊の鎮海灣に集りてより、はや二月あまりの浪枕、浮世の春を他所に見て、焔硝の臭、銃砲の響、骨の碎くる訓練に、心膽愈練れて、腕益、牙え、士氣は昂つて敵を呑む一萬八千の海上男兒、敵艦來れと待構へて居る。明くれば五月二十七日、前日の訓練に疲れ切つたる將卒の、曉の夢尙濃かなる午前五時、思ひ出すさへ肉躍る、各艦の無線電信機に感ぜし一信、敵第二艦隊見ゆ。聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、直に全艦隊に對し、急速出港の命を傳ふると同時に、大本營に宛て、

軍艦十八隻
 第一戰隊 三笠 敷島 富士 朝日 春日 日進 龍田
 第二戰隊 出雲 吾妻 淺間 八雲 常磐 磐手 千早
 第四戰隊 浪速 高千穂 對馬 明石

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動之を擊滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。との電報を發した。何ぞ其の語の詩的にして、其の意氣の豪壯なる。かくて我が主力艦隊の各艦艇は、逐次錨を抜いて豫定の航行序列を作り、午前七時には艦隊全部根據地を出發した。東郷聯合艦隊司令長官は、其の將旗を高く三笠の大檣頭に翻し、軍艦十八隻、驅逐艦、水雷艇合して二十八隻陣の延長五海里、雄姿堂々たるものであつた。我が艦隊は行く／＼、戰鬪準備を整へつゝ、洪波を蹴つて、沖の島に向ひ急進した。砲臺には彈藥を備へ、艦橋、其の他の要所には釣床を縛つて防彈障を造り、重要品は水線下若し

くは装甲部に納め、甲板各所には防火防水の要具を備へ、隔壁戸を締め、通信装置を驗し、其の他一切の戦備を盡して、最後に甲板を清めて滑りを防ぐ砂を撒いた。午前十時三十分東郷長官は各艦に向つて晝食の命を下した。士官室は既に戦時治療所と變じ、食卓もなければ椅子もなく、一同甲板に蹲つて、心ばかりの晝食を認めた。晩食の時再び此處に集る者が果して幾人あるであらう。是ぞ最後の會食と思へば、張詰めた心にも、坐に感慨に堪へぬものがある。敵情に關する電信は愈々頻繁となり、彼我艦隊は刻々相接近しつゝある。我が主力艦隊は正午、沖の島の北方約十五海里の地點に達した。而も未だ敵影を認めない。東郷長官

第三戰隊

笠置 千歲 新高

音羽

第五戰隊

嚴島 鎮遠 松島

橋立 八重山

第六戰隊

須磨 和泉 十代

田秋津洲

は止つて敵の來るを待たんよりは、寧ろ進んで之を迎ふるに如かずとなし、針路を右に折つて更に西方に向つた。山の如き逆浪は艦首に激して甲板を洗ひ、飛沫は颯として水面上三十尺の艦橋に達する。已にして午後一時三十分頃に至るや、朝來敵と接觸を保ちつゝ來りし我が第三戰隊を南西方に、第五第六戰隊を西方に發見し、茲に始めて我が全艦隊の聯絡を遂げた。尋いで同四十分頃我が主力艦隊は左舷南方數海里に當り、濛氣を破つて堂々進み來る敵の全艦隊を發見した。大小合して三十餘隻の朦朧は、大戰闘旗を檣頭に翻し、遙に其の後尾を濛氣の裡に隠しつゝ、北々東の針路を執つて眞一文字に航進して來る。雲を抜け出づ

る黒龍か波を蹴破る長鯨か。 壯大雄偉、實に目も覺むるばかりである。 參謀長以下幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立つて、敵艦隊を睥睨せる東郷大將は、各艦に戦闘用意を命ずる



東郷大將 實 (宮澤 甚三郎 筆蹟)

と共に、先づ敵勢力の薄弱なる左翼部隊を撃破せんと決心し、戦闘速力を以て、斜に敵針路の前方を横斷した。 偶旗艦三笠の檣頭、颯と翻りし一連の信號旗、皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ。

全艦隊一萬八千の將卒は覺えず奮躍した。

敵の艦隊既に指顧の中にあり。 艦内如何にと見渡せば艦長は艦橋に在つて戦備一切を督し、航海長は羅針盤を擁して艦の操縦に任じ、砲術長は距離を測つて砲火の指揮を統べ、水雷長は方位盤を整へて發射の機を窺ひ、分隊長は受持砲臺を指揮し、各從屬將校は夫々分擔の配置を守り、萬に一失なきを期して居る。 砲員は砲に、水雷部員は發射管に就き、連弾員は彈薬を運び、防火隊は蛇管を繰り、信號部員は揚旗索を握り、戦闘の開始を今や遅しと待つて居る。 中下甲板に降り見れば、防水戸は密閉せられ、鐵窓扉は鎖され、何れの區畫も人影寂として、電燈獨り輝き、唯要所要所に配置せ

られたる傳令兵の耳を澄して佇めるのみ。副長と甲板掛士官とは、艦の前後に奔走して、火災浸水の非常を警めて居る。前後二箇所の戦時治療所には、石炭酸の臭紛として鼻を衝き、看護は繃帯を整へ、軍醫は刀を執り、一脚の手術臺は早く愛國の血潮を舐めんと待つて居る。更に降りて彈藥通路に到れば、こゝは水線下十數尺なる温度百二十度の焦熱地獄、流るゝ汗を拭ふに暇なく、力に餘る大小の彈藥を各砲臺に供給する。轉じて機關室を窺き見れば、油の焦げる異臭先づ鼻を衝き、此方の機關室には、幾百貫の大曲肱が轟聲を發し、全速力を以て回轉せる有様、實に耳聾し眼も眩むばかりに物凄く、彼方の汽罐室には猛火炎々として絶え

ず投げ込む石炭は一瞬にして白熱の團塊と化す。朦朧たる中に、水を注ぐもの、油を差すもの、石炭をくぶるもの、此處には戦闘既に開始せられて居る。

午後二時二分我が艦隊は、敵を左舷南方約一萬米に見るに及んで、針路を南西に變じ、敵と反航の姿勢を執つた。我が速力十五海里、敵の速力約十海里、彼我艦隊は今や一分間約八百米の割合を以て相近づきつゝある。此の儘直進して敵と反航戦を交へんか、將た針路を反轉して敵の先頭を壓せんか、正奇の戦法未だ孰れに決するかを知らぬ。こゝ三笠の艦橋上を眺むれば、楮顔長身剃るに閑なき髑髏に飛沫の露を拭ひもやらず、屹然羅針盤を擁して立てるものは、開

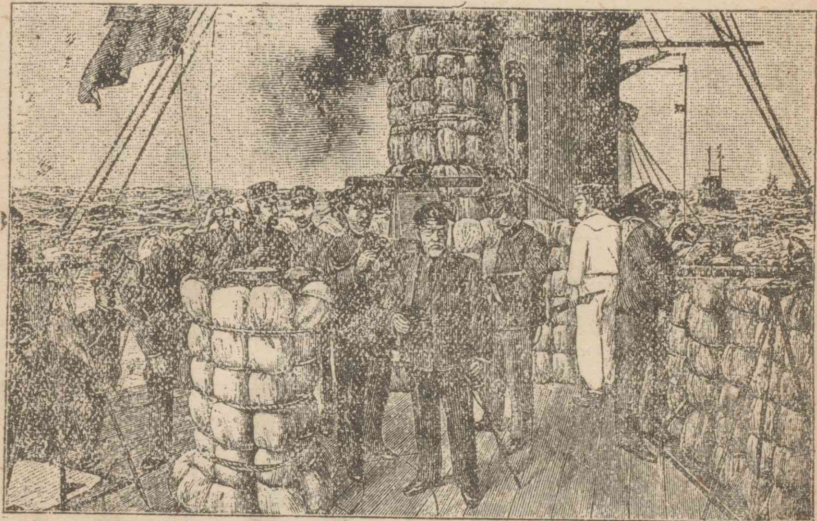
伊地知海軍大佐
伊地知彦次郎。後に海軍中將。

加藤海軍少將
加藤友三郎。海軍大將。内閣總理大臣。大正十二年六月十三日。

秋山海軍中佐
秋山眞之。後海軍中將。大正七年卒。年五十一。

布目海軍中佐
布目滿造。今海軍少將。

安保海軍少佐
安保清種。今海軍少將。



戰開開始の三笠艦 (東條大尉画)

戰以來旗艦長として令名噴噴たる艦長伊地知海軍大佐である。雙眼鏡片手に敵の行動を注視せるものは、冷靜沈毅、頭髮焦ぐるも猶熱せざる參謀長加藤海軍少將である。爛眼隆鼻、ノトを手にして悠々敵狀を寫せるものは、神謀鬼策機に應じて斷ずる。前任參謀秋山海軍中佐である。其の他航海長布目海

軍中佐は海圖を按じて彼我の位置を測り、砲術長安保海軍少佐は秒時計を握つて彈道の時間を計らんと構へ、各少尉候補生は或は測程儀を窺ひて距離を測り、或は傳話管に就いて命令を各部に傳へて居る。而して豐頬短軀、左手堅く長劍の欄を握り、右手軽く雙眼鏡を携へ、半白の粗髯を海風になぶらせつゝ、泰然として敵を眺むるものは、是ぞ我が聯合艦隊司令長官東郷海軍大將である。戰機は愈熟して距離測程士の報ずる聲は、九千米、八千五百米。既に十二吋砲の有効距離に達した。砲は彈丸を孕んで射手の指は引金に懸つて居る。萬弩齊しく發せんとして未だ發せず、滿を持して動かざること山の如し。正に是

山雨來らんと欲して風樓に滿つの時である。(此一戰)

三宅雪嶺

名は雄次郎。
哲學者。
評論家。
文學博士。
萬延元年(二
五二〇)生。

一三 元寇その一

三宅雪嶺

日露戰役の酣なりし時、朝廷は北條時宗に従一位を追贈せさせ給ひぬ。

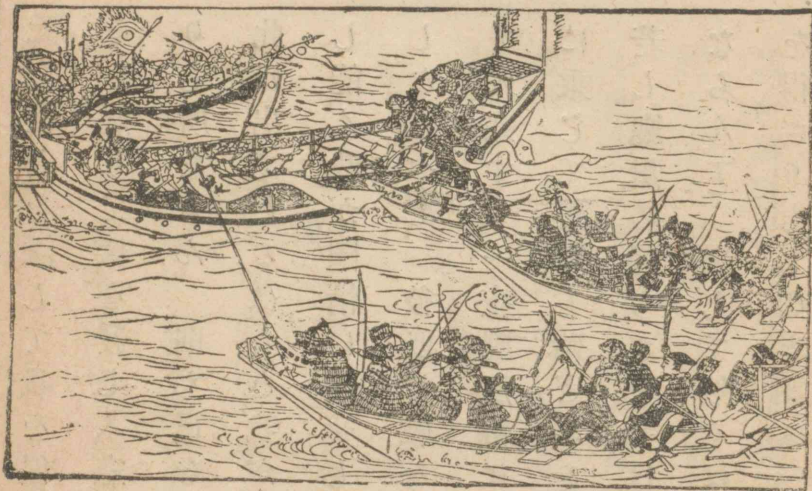
思ふに元は國を滅すこと四十有餘能くその呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たび此と干戈を交ふるや、之を撃破してまた近海に出没すること能はざらしめぬ。元、使者を遣はして好を通ずるを求め、時宗斷乎として之を拒めり。かくて、戰端はこゝに開かれたり。此に就きて自ら三個の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の

意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。

その三、拒絶は果して得策なりしか。

事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の意よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣はしたるは、實に文永五年にありき。時宗年甫めて十八、その拒絶の獨斷ならざりしを知るべし。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四年に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣方に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鑿にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方

針なりしは、國論の之を致し、ものとすべし。
 元の好を通せんことを求め、而して我の之を拒絶せしは、稍
 穩かならざるに似たれど、彼の國書を閱するに、實に我に於
 て拒絶するの已むべからざりしを知るべし。その書や文
 辭堂々、恩威並び具る。彼必ず以て我を心服せしむるに足
 るとせしならんが、顧みて我が日本の歴史より察すれば、全
 然拒絶する外、他に採るべき策あらず。その問を通じ好を
 結び、以て相親睦せん。といへるは辭として難すべきものな
 けれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態ある
 は、その語に明かなり。彼自ら何の異とする所あらざるべ
 しと雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接



(筆章長啓長佐土) 卷繪來鬻古蒙

したることあらず。怒らざら
 んと欲するも豈能く得んや。
 當時彼の國書を覽し者、一とし
 て書辭の不遜なるを咎め且憤
 らざりしは無かりしならん。
 國土面積の廣狹相懸隔するの
 著しきを思ひて彼の國力を誤
 信せし者は、成るべく圓滑に局
 を結ばしめんとして開戦に躊
 躇したらんも理非は既に明白
 なりしなり。

元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、その此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決して此に出でざりしなるべし。彼既に戰を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆没す。我が兵之に乗じて襲撃し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風の起らざりせば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん」と。果して然らばその開戰に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべし。而も言者の説は實に謬れり。

我が開戰に決せしは實に必勝の算ありしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵皆上陸し得たりとせば、彼我の勝敗則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

一四 元 寇その二

三 宅 雪 嶺

元の時代は支那の古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船は閣龍コロナスの亞米利加發見に用ひしものより尙堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壊せしに徴すれば、以て略其の構造の如何を察する

閣龍
伊太利の航海家。
(1486-1506)

に足らずや。彼累りに諸邦を征服せしかども、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。又彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。既に十萬、二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず、兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得る所なるか。糧を敵に取るの心算なりきとすとも、全軍を支ふるに足るべき食料を、徴發するは頗る困難なる業ならずや。若し我に於て手を拱きて彼の欲するがままに従ひしならば、或は徴發に依りて全軍を給養し得たるべきも、是到底望みて得べからざる所ならずや。嘗に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戦の結果、彼又勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内

マルコ、ポ
ロ
伊太利の人。
元主忽必烈に
仕ふ。
(1256-1295)

を指して西上せし者十九萬人若し此に關西の兵を合せば數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むること亦多し。十萬、二十萬の元兵を撃擢するに於て何か有るべき。戰亂を見ざること五十餘年に互れりと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを経ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭を是事とせしもの決して偶然なりとせず。當時此の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコ、ポロの記する所に據れば、元兵の大敗せるもの、兩將の不和に由りしが如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が

主將の不和なるに加ふ、單にこれのみを以てすとも勝敗の數既に明かなり。如何なる點より察するも、我、彼を殲滅する理ありて、彼、我を征服する恐なし。我の斷々として拒絶せる、決して、（謀りのたゞりかたは、い）無謀の舉にあらす。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは、謬想に過ぎず。龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしは、いともかしこし。既に上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを、（見る）目睹す、國內の民誰か奮つて國に殉せんとせざらん。之が爲に上下舉りて國難に當らんと、の決心を固めたるや、疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來れりとせんか。乃ち我が兵の如何に勇を鼓して邀撃せ

しかは知るべきなり。その海上に於けると同じく、之を陸上に鑿殺したるや、必ずるに難からず。颶風の起りしは、幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初は多少の苦戦あるべけれど、終に全勝を制し、更に勢に乗じて高麗を略し、かくて漸く醞釀せる國內の紛争を移して外地の經略を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきものありしならん。颶風起りて戦はずして勝ちしより、竟に武を海外に用ひず、徒に國內の紛争に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者あり

鳥居勝商

三河の人。
奥平信昌に仕
ふ。
天正三年(二
三三五)節に
死す年三十六

湯淺常山

名は元禎。
漢學者。
岡山の藩士。
天明元年(二
四四一)歿す
年七十四。

奥平九八郎

初め今川氏に
屬せしが、天
正元年父貞能
と共に家康に
歸し、長篠城
を賜はる。

長篠

三河國南設樂
郡にあり豊橋
市の北七里餘
豊川の上流に
あり。

て遂に止めたり、智とすべきなり。此の一役に於てだに海岸に造船の音喧しく、爲に費し、所莫大の額なりきと傳ふ。若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇したらんには、國力の底を傾くるに至りしは疑ふべくもあらず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを待たんや。(小泡十種)

一五 鳥居勝商

湯淺常山

天正三年、勝頼、奥平九八郎、信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀をめぐらし給ふ處に、城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉ら

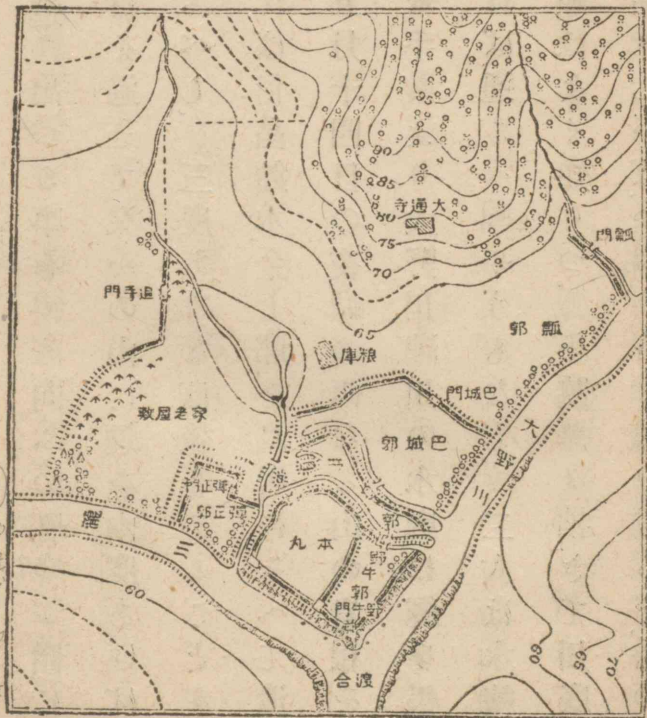
雁峯が嶺
長篠城の西一
里。

むため、鳥居強右衛門勝商に命じて、密かに城を出す。鳥居「逃れ出づる事を得ば、向ふの雁峰が嶺に煙をあぐべし。三日を過ぎて、又かの山に煙を兩度あげば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷あることを知り給へ」と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす。

五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入る。寄手素より大野川、瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば、通るべきやうもなし。二人は水練の達者にて、川の淺瀬はよく知りつ。小脇差を抽きて、川底を潜り、繩を切つて通りしかば、からくと鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人、五月雨には、かゝる川をば、鱸の通るならん。」

廣瀨
長篠城の南半
里。

十五日
天正三年五
月。



(る據に史戦本日)圖地城篠長

せらる。鳥居は信昌なほ心もとなくや候らん。忍びて城

にあがり、雁
峯が嶺にて
煙をあげ、十
五日に岡崎
に参りて、し
かじかの由
を申す所に、
信長、其の日
岡崎に着陣

篠原
長篠城の西南
瀧川を隔て、
相對する處。

穴山
穴山梅雪。信
玄の姉の子な
り。
信綱
信玄の弟。

に入る事を得ば、はや後卷候へき事、審に申さん。とて引返す
鈴木は、信昌が父、美作守貞能に告ぐべし。とて、鳥居に別れけ
り。

鳥居、雁峰が嶺に上り、合圖の煙三度あげて後、篠原といふ處
に行き、忍び入らんとするに、柵嚴重にして砂をまき、出入の
人の足跡をあらためしかば、なかく入るべき様なくてた
めらひけるを、穴山の手の者見つけて、怪しみて遂に搦め取
りけり。勝頼、逍遙軒信綱を以て仔細を問はるゝに、鳥居、事
の由をありのまゝに答へしかば、勝頼、鳥居を呼んで、汝が命
を助くべし。汝、城際に往きて、信長は上方の軍にて、此の城
の後卷思ひも寄らず。と言はゞ、城兵降参すべし。さらば汝

一宮
三河國寶飯郡
桑富村にあ
り、長篠の西
南一里半。

野田
三河國南設樂
郡にあり。長
篠の西南二里
餘。

作手
三河國南設樂
郡にあり。長
篠新城の西方
なる山谷の諸
村の總稱。

徳富健次郎
蘆花と號す。
文學者。
明治元年生。
富士一つ
與謝蕪村の
句。

に厚く賞せん。」と言はれしかば、鳥居乃ち心得候。とて、城門近
く至り、後卷とて、信長御父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣
は一宮に陣せり。徳川殿御父子、野田まで御馬を出された
り。此の城運を開かんこと掌の中にあり。と言ひければ、甲
州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて、勝頼にかくと申せ
ば、勝頼大いに怒つて、城に向け、礮にして殺しけり。長篠に
て勝頼敗北して後、信長を始め、鳥居が無雙の忠なることを
感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。(常山紀談)

一六 村の六月

徳富健次郎

六月になつた。麥秋である。「富士一つ埋み残して若葉か

な。」其の若葉の青暗い間々を、熟れた麥が一面に日の出の
様に明るくする。陽曆六月は「農功五月急於弦」と云ふ農家
の五月だ。農家の戦争の中の最劇戦は六月である。六月
初旬は小學校も臨時農繁休をする。猫の手でも使ひたい
時だ。子供一人、どうして中々馬鹿にはならぬ。初旬には
最早蠶が上るのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を刈るの
だ。梅雨に入つて、じめじめした日がつづく。蓑笠で田も
植ゑねばならぬ。「田植をしまふときはばくする。」と皆が云
ふ。雨間を見ては、刈残しの麥も刈らねばならぬ。刈りお
くれると畑の麥が立つたまゝに粒から芽をふく。油斷を
見すまして作物そつち退けに増長して來た草も取らねば

ならぬ。甘藷の蔓もかへさねばならぬ。陸稻や黍稗大豆の中耕もしなければならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。お屋敷に叱られるので、東京の下肥取にも行かねばならぬ。時都合はる時も時とて飯料の麥を、水車に持つて行つて、一晚寝ずの番を、して搗いて來ねばならぬ。最早甲州の繭買も隣村まで入込んださうだ。

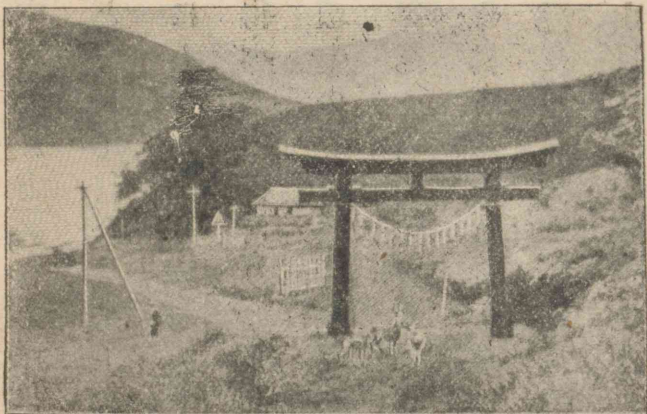
空ではまだ雲雀が根氣よく鳴いて居る。村の木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いて居る。田甫の小川では葎切が口やかましく終日囀つて居る。杜鵑が啼いて行く夜もある。梟が鳴く晩もある。水鶏がこと／＼たゞく宵もある。螢が出る。蟬が鳴く。蛙が鳴く。蚊が出る。ぶよ

が出る。蠅が眞黒にたかる。蚤が跋扈する。かなぶん瓜蠅天道蟲、野菜につく蟲は限もない。皆生命のためだ。皆生きねばならぬのだ。到底取りきれぬ事ではないが、うちやつて置けば野菜が全滅になる。取れるだけは取らねばならぬ。此方も生きねばならぬ人間である。手が足りぬ。手が足りぬ。家の人だけではやりきれぬ。はては甲州街道から地所土地コモツライに離れた百姓を雇つて、一反何程の請負で田も植ゑさせる。麥も刈らせる。それでもまだやり切れぬ。大病人の外は手をあけて居る者は無い。盲目の婆さんでも手さぐりで茶位は沸かす。豌豆や隠元は畑に珠數生りでも、もいで煮て食ふ暇は無い。如才ない東京場末の煮豆

屋が鈴を鳴らして来る。飯の代りに黍の餅で済ます日もある。近い處は起きぬけに朝飯前の朝作り。遠い畑へは女の兒が片手に大きな藥罐、片手に茶受の里芋か餅かを入れた風呂敷包を提げて、小さな體を歪めて重さうに持つて行く。この季節に農家を訪へば大抵は門をしめて居る。猫一匹居ぬ家もある。何を問うてもくるくるとした眼を瞪つて「知らない」と答へる五六歳の女の子が赤坊と唯二人留守して居る家もある。こんな時によく子供の大怪我がある。(みゝずのたはこと)

一七 金華山に遊ぶ 紅行文 大町桂月

金華山
陸前國牡鹿郡
の海中にあ
り。



山 雉 の 渡

上陸すれば、山鹿角をふりたてゝ人を迎ふ。爪先上りに七八町ゆきたる處に黄金山神社あり。先年火災にかゝり、社務所は新築せられたれど、祠殿は未だ出來ず、假殿を設けたり。やがて板鳴りて山に登ることを報ず。知るも知らぬも三十人ばかり玄關の前に立ちそろへば、祠官呼びとめて一々握飯を與ふ。われは午食せざるを例とすればうけず。白衣をつけたる導者一人さきに立ちて導く。

路は祠の右の清溪流るゝ處より上る。きはめて登り易き山坂なれど、一行の中足弱きもの少なからず、導者爲に歩をとめて待合せて上るを以て、路はかどらず、凡そ一時間許にして頂上に達しぬ。一人ならば三十分ばかりにて上り得べき路程なり。

頂上の尖りたる處に小祠あり、龍藏權現といふ。東は太平洋茫茫として際なく、一點の帆影をも見ず。西は近く牡鹿半島を望み、遠く松島の群島を望む。北はかさなれる峯に隠れて見えぬ。南は遙かに下總の犬吠崎と相對す。脚下山雉やまどりの渡を帆かけて行く渡舟さながら白鷗の如く、矚目爽快を極む。一行拜し終つて、茫然佇立するものあり、草の上

に横たはるものあり、石に踞するものあり。十二時には猶一時間もあませど、腹へりたればとて一人握飯を食ひはじむれば、衆みなこれにならふ。その飯の香をかぎつけたりけん、鴉幾羽となく集り來り、近きあたりの樹にとまりて啞啞として啼きて求むる所あるに似たり。その人に馴れて怕れざること、淺草觀世音の鳩もたゞならず。こゝにまた一人食ひあましたる飯を紙に包みて空に擲ぐれば、その未だ地に落ちざる前に、枝上の鴉飛び來りてついはんで去る。衆之に倣へば紙包空に亂飛するに、鴉一々之を受く、恰も洋犬の菓子を受くるが如し。かくて擲ぐべき握飯盡きぬ。なほ口に受けざる鴉多けれども、もはやねだるべきものな

しと見てとりけん、一羽去り二羽去り、終に隻影をもとめず。かしこき鳥かな。無邪氣なる善男の徒しばしは鴉になぐさみしが、裏山の路なほ遠ければとて起つ。

金華山の奇は裏山にあり。裏山を廻らざるものは金華山に遊びたりとは云ふべからず。路は東に下る。斧斤入らざるに幾百千年。老樹しげりて天を刺す。蘚苔につままれたる怪岩の下より清水流れ出で、溪を爲し、白雲洞穴に涌きて人と路を争ふ。巨石處々に横たはりて、一々其名あれども、さまで奇なるものありとも覺えず。衆はじめは魚貫して下りしかど、いつしか脚の健やかなるものは先んじ、弱きものは後るゝこと一町となり、二町となり、四五町

となり、終に白雲の中に入つて見えぬ。下りて海岸に出づれば、廣大なる岸層斜下して海に入る。之を千疊敷と稱するは、その廣きを取れるなり。千疊敷の土を戴く處、二株の老松清陰を横たへ、萬里の天風に傲嘯す。こゝに憩ひて汗をぬぐひ、且好風景を賞し、且後着者を待ちしが、最も後れたるものゝ來りし時は、われらは既に休みあきたるころなれば、幾ど入れちがひになりて發足す。斷巖裂けて深く山に入



千 疊 敷

る處千人澤と稱す。また大浪越とも稱す。兩崖の間わづかに數尺、深さ十尺、長さ二三百尺に及ぶ。天吳戲に靈鋸を以て截りさりけん、怒濤雪を崩し、萬雷を轟かして進入する様は、唯是白龍の狂ひ亂るゝもかくや。幾たびか清溪を涉り危巖を傳ひ、終に急坂を上りはつれば、山上に通ずる路あり。はたと惑ひて導者の來るを待つ。導者はさまで後れ居らざれば七八分にして來る。曰く「下られよ、最も奇峭雄偉を極むる大箱崎に出づるなり。」

大箱と名づけたるもうべや、げに横の一片と蓋とを除き去りたる一大巨函、天吳之に珍寶を藏せんとするも怒濤妬んで奪ひ去らんとす。俯して之を臨めば心慄き目眩す。奇

物凄

極つて怪に、雄壯極つて悽愴なり。こゝより數町にして小箱崎あり。大箱崎よりは稍小なれども、溪流落ちて巖角に碎けて霧となり、日光に映じて虹を現す。壯觀大箱崎に譲らず。凡そ此の間巉巖長く連亘し、高く峭立し、北に向つて大濤の突撃に當り、濤怒り巖叫ぶ。前面には江の島の列島波間に浮沈し、手をのばさば之を捫すべし。金華山の奇觀こゝに至りて極れり。

路は海を離れて峯に上る。もはや見るべき物なければ、足を早めて急行するに、いつしか獨往の客となりぬ。脚疲れ渴を催したる時、天狗の力水とて巖隙より出づる清水を得たる、こそいとうれしかりけれ。峯又峯を上下するに、一鳥

一鳥鳴かず
茅橋相對坐終
日一鳥不鳴山
更幽。王安石。

鳴かずして山更に幽なるを覺ゆ。巖石のにはかに動くか
と見れば臥したりし鹿のわが蹠音を聞きてにげゆくなり。
鹿より小なるもの驚いて走る。幾たびとなくふりかへり
て我を見るは人の恐しきにや。其の前方の顔赤く後方の
尻も亦同じく赤きは猿なり。はじめの程はこれ顔、これ尻
見わくることを得しが終には見わけつかず、而して猿のふ
りかへることなほ止まず。一赤一赤相轉回して、遠く白雲
深き谷底に落ち行きぬ。愛宕祠に來れば本社近く脚下に
あり。路本社の左に出て、山廻りはこゝに終れり。秀靈
なるかな、金華の一島。牡鹿半島と二十四町の海峡を隔て
て東海の外に孤立す。さらでたに潮流急なる山雉の渡山

鷹山公

米澤城主。
文政五年(二
四八二)卒す
年七十七

平洲

細井徳民。
尾張の儒者。
享和元年(二
四六一)歿す
年十四。
嘉納治五郎
教育家。
前東京高等師
範學校長。
貴族院議員
萬延元年(二
五二〇)生。

山、絶たぬが、あきると
靈一たび怒れば風浪險惡往々行舟を覆す。一島これ山、一
山これ島。島中絶えて平地を餘さず。燈臺と黄金祠との
外には農家もなく、漁家もなく、住む人よりも猿多く、鹿多し。
峯脈六十八、中央に最も高き主峯を起し、溪谷四十八、處々白
珠を飛ばす。洵に塵外の別天地、東海の最大壯觀といふべ
きなり。(續花紅葉)

一八 鷹山公と平洲

嘉納治五郎
細井平洲が米澤の鷹山公上杉治憲の賓師となつて居たこ
と、は前後僅かに二年に過ぎなかつた。が當時の諸侯の尊
大な風習にも拘らず、治憲は平洲を呼ぶに必ず先生といひ、

門人
禪島石梁。
文政十年(二
四八七)歿す
年七十五。



上杉治憲

師弟の禮を正して、心から之を敬重した。その後、平洲は尾州侯の儒官として江戸に居るし、治憲は退隱して米澤に居られるので、互に相見ざること十餘年、治憲は朝暮其の師を仰慕する情に堪へなかつた。それを當主治廣が察して、尾州侯に平洲の賜暇を請はれると、尾州侯は之を快諾したので、平洲も大いに喜び、直ちに米澤に赴いて、滯留五十日、その間の禮遇は實に優渥を極めた。この手紙は其の後平洲が門人に贈つたものゝ一節で、當時治憲の舊師に對した態度の美し

さがよく顯れて居る。

府城
米澤城。
府城より三里、大澤と申す驛に到り候處、老侯親しく郊迎ありとの沙汰相聞え候に付、急ぎ候うて八つ過に羽黒堂と申す地に到り申候。此處は南郊一里五六町も府城を距り申す處に候。最早侯の儀衛遙かに相見え候に付、五六町轡を下り歩み申候處、普門院と申す寺の門前に、兩傍に雲從俯伏致し、候は路の中心に立つて相待たれ候。進んで拜し申候處、愚情は地に手して拜したく存候へども、侯の態度、さ候はゞ地に手して御答拜これあるべき様子故に、是非なく足跡に手して拜し申候。まづ何の言もなく、老淚滿顏に御座候。老侯も一

筆蹟

寒冷彌御安寧
被成御勤仕奉
賀候至日には
遠方御來會被
下添さりなが
ら多客雲集御
疎末之御事殘
念奉存候其節
は好酒御携贈
不淺添奉存候
十一月十八日
細井甚三郎
加藤分左衛
門様
不及貴答

向無言にて、涙滿面、先生御安泰。とばかりにて、御案内申すべしとて寺門に入られ候。外門より中門まで足指仰ぎ申候。三町ほどの坂に御座候。聯歩にして進み申候。なかなか一歩も前行は之なく候。杖を進められ候へども、辭して杖つかず候間、若しや躓きも致すべきかとの心遣ひと相見え、手を引かん許りに比肩して進まれ候。堂に上り候節、御案内と申され候う

細井平洲筆蹟 (名家手簡)

此の階を上り、堂板に坐し、俯伏して待たれ候。それより座に上り候時、是は例御存知の通り、辭讓久しく候うて、漸く對座に相成、色々の言も出で候うて、御互に言語に及び申候。

武者小路實篤

武者小路實篤

文學者。
思想家。
明治十八年生。

此の手紙を讀んで行く中に、覺えず涙がこぼれるではないか。聖經賢傳といふも、本たゞ人情の醇粹敦厚な所から出たのである。師弟の溫情がこゝまでいつた所は、眞に是道義の活現で、誠に萬代の龜鑑とするに足るものである。

(青年修養訓)

一九 花咲爺

武者小路實篤

今度自分は「かちく山」を芝居に書いた。書いてゐる内に、
ついでに何か他にさういふ種類の噺で自分が芝居に仕組
むものはないかと考へた。又自分は「かちく山」の終りが
復讐で終つてゐるのが少し氣になつてゐた。其處に自分
が思ひ出したのは「花咲爺」の噺だつた。この噺は面白い噺
だとその時思つた。噺の文字者戦争と平和トルストイでもよろこびさうな話だ
と思つた。「花咲爺」は無抵抗主義の實行者だと思つた。最
愛の犬を殺されても怒らず、その死屍をもらつてくる。や
つとつとつた白をこはされても怒らず、その灰を貰つてく
る。その灰から花が咲く。面白い話だと思つた。殿様は
世論と見てもいゝ。遂に善がこの世にも勝つてゐるが、そ

れは悪人亡び善人榮えるではあるが、其處にもつと根據が
ある。それについてはあとで云ふとして、更に進んで、この
花咲爺を運命を生かす天才と見ても面白い。犬が居れば
犬を生かし、犬が殺されると犬が殺されたことを生かし、白
をつくれれば白を生かし、白が灰になればその灰になつたこ
とを又生かす。そして生かすだけの實力があると見ると
なほ面白い。又慾張爺は幸運を悪運に變じる名人と見て
も面白い。同じ犬でもつときたないものをほり出し、同じ
白からきたないものを生み、同じ灰から罪をつくる。その
對比がはつきりしてゐて、中々面白い話だと思つた。
かう云ふことは實際によくあることだ。同じく金もち

ながらそれから徳を生む人もあれば、罪を生む人もある。同じく名譽心をもちながらもそれをよく生かす人と罪を犯す人とある。かういふ例はいくらでもある。それが「花咲翁」の話にはうまいいつてゐる。お晰になつてゐるが、取りやうによると中々面白い。その對比がうまいいつてゐる。そしてつひに「花咲翁」を以て代表された善正・實力が最後の勝利を得てゐるのも面白い。自分はその以上に花咲翁の自信ある善良さ、善の勝利の喜を味はふことが出来ることを望んで「花咲翁」をついでに書くことにした。

この世にはいろいろの不幸がある。併しその不幸から善きものを生み出さうとし、又生みだし得るものは賢い人である。

ある。與へられたる運命を最もよく生かすと云ふことは人間の一生にとつて大事なことである。

(自己を生かす爲に)

二〇 門生に示す

室 鳩 巢

室鳩巢
名は直濟。
徳川幕府の儒
官。
享保十九年
(二二九九)歿
す年七十七。

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として、勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を涉りなば、年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも何の益あるべき。即ち今、余が身の上にて候。され

陶淵明
名は潛
晉人。

筆蹟

八月十三日之
貴翰九月四日
に至りて來泰
拜見仕候何方
に淹滞仕候哉
南部兄より之
副書も同日に
而御座候先以
尊履御清勝旨
欣躍不過之奉
存候今以公務
殷繁不被取官
暇候由御賢勞
之故奉察候先
頃進呈仕候軍
器考序相達御
懇勸之御謝詞
恐入奉存候去
共願應賢意之
旨被仰下多幸
之至に奉存候
同文通考序之

ば古詩にも、

少壯不努力老大徒傷悲。

八月十日
南遊先
志不
家
以
願

といひ陶淵明も、

盛年不重来、一日難再
晨、及時當勉勵、歲月
不待人。

室 といへば、古人も此の感
鳩 懷を同じうすとぞ見ゆ
巢 る。此等の詩句、時々吟
筆 詠して勇進の氣を振ひ
起すべし。又世に傳ふ

儀蒙仰委細御
書體被仰下且
又別幅に目錄
題注被記之候
被入御念候儀
と奉存候時
技窮可申候へ
共先如何様共
構思仕候而追
而可受御指教
候

九月十八日
室 新介
花押
新井勸解由様
座前

朱文公。
朱藻。宋人。
陶侃。
晉人。
陶淵明の曾祖
父。

子
以
以
思
九
新

蹟
る朱文公の勸學の文に、
勿謂今日不學而有來
日。勿謂今年不學而
有來年。日月逝矣、歲
不我延。嗚呼老矣、是
誰之愆。

言簡にして意も明白な
り。折節打誦じて自ら
警むるによかるべし。

それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。
大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、

生無益於時死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も曩祖（祖先）以來の家法にこそと思はる。凡そ人と生れて學に志ありといふきは（後）の生きて時に益なく死して後に聞ゆることなく草木と同じく朽ちてんはいと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵して日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなれば急迫にして求むべきにあらず、たゞ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余昔加賀にありしとき、士族の

紹鷗
織田信長が茶道の師。
利休
千宗易。
豊臣太閤が茶道の師。

中に紹鷗・利休が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役するとき道中茶具を持して逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、「いかにすけばとて道中にてはやめよかし」といへば、その人いふは「道中とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なればわが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん」としてその後もやめざりき。學者の道に志すも此の人の茶湯を好むが如くなるべし。（駿臺雜話）

二一 傑作

綱島梁川

きのふは建部にお伴をしてもらうて例の車上行を企

綱島梁川
名は榮一郎。
倫理學者。
宗敎家。
明治四十年歿
年三十五。
建部
弟建部政治。

余丁町の舊居

東京市牛込區
大久保余丁町
十七番地。
この時は同町
四十八番地に
住す。

てた。殆ど二年ぶりだ。見るものごとが懐かしい。車上の顔を吹く風までが心ありげに昔話をしてくれる。余丁町の舊居を訪うて見たが、こゝばかりは跡方もない。滄桑の變に車上の浦島呆然たりけりだ。それから天神の森に行き、眼下の景なる刈麥や苗代を見、雨の如く繁き蛙の聲を聽いて歸つて來た。僕が近來の傑作、諸君にも報告して下さい。(梁川遺稿書簡集)

幸田露伴

名は成行。
文學者。
文學博士。
慶應二年生。

三三 水精の玉

幸田露伴(三重)

玻璃碗に

汲みて湛へし

玉川の

玉なす水に、

水精の

水なす玉を

そと入れて、

しづかに見れば

蘆の葉の

白露墜ちて、

行く川に

痕無きが如、

水の中に

玉の影なく、

玉の前に

水の色無し。

濁なき

水と澄む世に

曇なき

玉と身は生れ、

相容るゝ

心すゞしく、

我が名も無くて

過してしがな。
(願望)
(東亞の光)

杉村楚人冠

名は廣太郎。
新聞記者。
明治五年生。

二三 田園の夏

杉村楚人冠

家を大森の片ほとりに移してより此に一年。四季毎にかはり行く韻の趣中にも夏ばかりめでたきはなし。朝はまだきに起き出づ。風涼しく氣清ければ、自轉車に打ち乗りて大井・鈴ヶ森の邊を走る。行人稀にして舞ひのぼる塵もなし。曉風身に沁みて夏の半ばなるを覺えず。日麗かなる時は露けき野草踏みしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら、彼方此方泳ぎまはりて汀に歸れば、水樓、人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。歸りて朝食したゝむるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深き

茄子の淺漬に、番茶の煮ばな香いと高し。食卓を圍むもの母と妻と二兒と、伊豆より來れる少婢と、これに某生とわれとを加へて合せて七人なり。某生は夏季休業中來りて我が家に宿れるなり。

時餘りあれば、更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を灌ぐ。さるべき暇なき時は白麻の衣軽く着なして直に東京に向ふ。八時十三分の汽車を待合す人々大森停車場のプラットホームに賑はし。知る、知らぬ、互に目禮して昨夜は暑かりしなど語合ふ。流石に都離れたる様をかし。

晝少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後午餐の膳に就

く。清風徐ろに來るところ、庭の櫺の影濃かなるところ、遙かに沖なる白帆のゆきかふを眺めて、いつとはなく夢に入る。覺めて後、日尙高ければ某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入り、蟬聲雨の如きを聞きつゝ休らふ。偶、都より友の訪ひ來るあれば舟を齧うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頬ばり、盃茶に喉をうるほす、その快如何ばかりぞや。歸りて拾へる貝の汁をどよのへてもてなす。旨からずとせんや。朝のうちに来べき八百屋の來らぬ折は、裏の手作りの芋を煮て客に饗すべし。家の裏にすべて十歩の空地あり。夏至る毎に、自然生の蔓

生じて櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅かに曇りて暑さやゝ輕き時は、某生と共に赤裸々にて之を掘る。掘り掘りて手も届きかぬるに至れば大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて掘進む。二尺ばかりなるもの二つを得れば、以て一家の食膳をみたすべし。乃ち泥まみれのまゝ海に出でて洗ひ來る。歸れば薯汁既に成りて我を待てり。水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕餐の膳に就く。朝膳に列なれる人の一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる嬉しからずといはんや。日暮れなんとするに、風益涼しく氣愈清し。東の障子明放ちたるところより見下せば、稻田のあなた暮れ行く鈴ヶ森

八幡の濱の家々を隔て、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。幼きものは少婢に伴はれて畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかかなげにかきならず。われは庭の大樹にハンモック懸けわたして、のけさまに臥しつ。縁に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば星光愈明かに、樹梢をそよぎわたる風ことに涼し。垣を隔て、往きかふ村人の取りつくるはぬざれ言、手に取るごとく聞ゆ。夜更けぬれば、人聲やうく疎なり。時には山王の杜のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥床に入りやせまし、入らずやあらましなどうち案じつ、書を讀むに、燈火を慕うて飛來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、其の

外は名をだに知らず。麗しき光を水に映して、水際の松林を離れゆくさまのをかしきに、竊かに門を開きてあこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶ音など聞ゆ。(へちまの皮)

二四 故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらず。花にも月にも喜にも悲にもまづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得る地にはあらず。され

正岡子規。
名は常規。
俳人。
明治三十五年
歿す、年三十
六。

ど故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親同胞ともに今は故郷にあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。想へば、十餘年の昔はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出て行かんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に一點の熱涙は覺えず頬のあたりに流れ来るを見送りの人に見せじと顔そむけたる時の苦しさ、何やらん胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは離れうきものなり。故郷近くなれば、城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種な

たんぎのすめ

れ。低き家、狭き町、淋しき繩手、丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。まづ身よりの家を此處彼處と音づれて久濶の情を敍ぶれば、年老いたる婆々様、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顔さへ見覺えたるまゝに、少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも歸り着きし瞬間なり。變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、いさゝかながらかれもこれも變り行きたるこそなかく、に聞きて見てゆかしけれ。人の上につきて第一に變りたるは、わが従弟妹のいたくも成長

筆蹟
今日も今日と
非常に強つて
居る際君の御
手紙に接し覺
えず活氣が出
た誠にうれし
くてたまらん
れ此頃は何て
も悲しい代り
に又何でもう
れしい事があ
る殊に今はモ
ルヒネの呑み
たてであるか
ら殊に早く愉
快を感じたの
だ君察してく
れ給へ今朝か
らもがきにも
がいた果が今
此小康を得た
のだ眞難有
い當分これ
日がくらす
だらうほしい
のがあつたら
後から注文す
る左様なら
五月四日常規
古島兒

今日も今日と
非常に強つて
居る際君の御
手紙に接し覺
えず活氣が出
た誠にうれし
くてたまらん
れ此頃は何て
も悲しい代り
に又何でもう
れしい事があ
る殊に今はモ
ルヒネの呑み
たてであるか
ら殊に早く愉
快を感じたの
だ君察してく
れ給へ今朝か
らもがきにも
がいた果が今
此小康を得た
のだ眞難有
い當分これ
日がくらす
だらうほしい
のがあつたら
後から注文す
る左様なら
五月四日常規
古島兒

正岡子規筆蹟

したることなり。「都の人こそ來
たまへれ。われも其の顔見ん。」な
どひしめきあひ、わが前に跪きて
禮を述ぶるもあれば、襖の隙より
はづかしげに窺ふもあり。をさ
なきは、はじめて見たる顔もあり。
さらぬもおもかげばかりはもと
のまゝにて、振分髪（うぶみ）の、兒鬢（こむす）に變り
たるも少からず。曾て見し時に
は、小學讀本を高らかに讀上げて
誇らしげに人に聞かせたる男の

子の今はや海陸軍を談じ、外國の形勢を説く程になりた
るもあり。唐黍の穀などもてこしらへたる籩を箱の上に
並べ、まゝ事に餘念なかりし女の子の嫁入（よめいり）すべきほどにな
りてわが膝もとに茶を汲みて置きながら、顔もえあげて退
きたるなど思へば、彼方よりは我をもしか年とりたりと見
るらんと、獨り心に恥づること多かり。
戸の外に出づれば、何縣士族寄留（きりう）といかめしく標札せる家
どもの、大方は聞き知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕
の人々多く見受けらる。少き時より馴染になりし本屋は
昔の様ながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知ら
で、よそくしくもてなしたるも本意（ほんい）なく覺ゆ。豫て知り

たる道具屋は引越し、か潰れしかあらぬ店となりて、淋し
 かりし武家町の角に料理屋の櫓を並べたるもあいなしや。
 いで菩提所に詣でて、久しぶりに櫓にても手向けんといひ
 ゆけば、山門なかば崩れて一條の汽車道は其の傍を横され
 り。あなやと驚きてすこし左に曲れば、數百の墓累々とし
 て、未だあれはてぬとにはあらねど、彼の鐵道に隔てられ、父
 君などの墓のうしろには一步ならぬに粟黍など秀でたり。
 一目見るより覺えず目をしばたきぬ。
 粟の穂のこゝを叩くなこの墓を。
 嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけて
 も嬉しきは故郷なり。〔子規隨筆〕

河上肇
 經濟學者。
 法學博士。
 京都帝國大學
 教授。

二五 ロイドジョージその一 河上肇

ロイド、ジョージは到頭英國の總理大臣になつた。

現代世界の政治家の中でロイド、ジョージは私の最も好む
 政治家である。彼は弱者の味方である。殊に彼は不幸な
 る弱者が無慈悲なる强者の爲に無道の壓制に苦しむを見
 る時は、さながら己が面に唾せられたるが如く憤然として
 起つ。而して此の强者を抑へ彼の弱者を扶くるが爲には、
 殆ど己が身命の危きを顧みないのである。以て六尺の孤
 を託す可く、以て百里の命を寄す可し、大節に臨んで奪ふ可
 からず、君子の人か、君子の人なり。とは全くロイド、ジョージ

六尺の孤
 曾子の語。
 論語に見ゆ。

のために言つた語ではあるまいか。

ロイド、ジョージは、ウェールスなる一村落の小學校長の子である。四歳にして、父を喪つた時は赤貧洗ふが如くであつた。それを救つてくれたのが、母の弟なるリチャード、ロイドである。

リチャードは貧乏な靴屋であつたが、進んで、姉と二人の甥とを自分の家に引取り、彼自らは遂に獨身生活を通した。

リチャードも亦實に六尺の孤を託すべき人物であつた。

ロイドに其の家を與へ、其の衣食を給したのは、叔父である。彼に聖書を讀ましめ、天を畏れ人を愛すべきことを教へたのも、亦叔父である。



ロイド、ジョージ

ロイドがわづかに二十一歳の青年を以て辯護士試験に及第したのも全く叔父の丹誠の結果である。しかし叔父が稼ぎためた資金は、全く彼の學資に消費してしまつて、試験に及第はしながら、法服の新調にさへ當惑した程であつた。洵に彼自ら言へるが如く彼の叔父は彼を教育するが爲に、彼の時と彼の精力と彼の金をば總て費し盡したのである。

ロイド、ジョージ自ら其の少年時代の生活を顧みていふ、吾は殆ど生の肉を食べたことは無い。さうして私は能く

覺えて居るが、吾々の最大の贅澤は、日曜日の朝、皆が鶏卵を半分宛貰ふといふ事であつた。ロイド、ジョージ傳の著者エヴァンス又此の一句を引來つていふ、かゝる繪に筆を入れて細かく描き足さうとするならば、却て其をにじますのみである」と。

されば私も、あはれなる靴屋の主人が當時如何に苦心したかに就いて、最早この上は語るまい。古人も、至誠にして動かざる者は未だ之あらざるなり」と言つて居るが、げに至誠の力ほど恐ろしい者はない。見よ貧しき靴屋の主人の至誠は凝つて大英國の大宰相を造り出し、而して是の大宰相の大精神は、臆て四海萬國を支配せんとするではないか。

論文評論

二六 ロイド、ジョージその二 河上肇

ロイド、ジョージは間もなく選ばれて代議士となつた。かくて數年の後、彼の一生涯にとつて一大事件といふべきものが起つた。それは南阿戰爭である。

南阿戰爭とは、英國が阿弗利加の南端トランスヴァールの金鑛を獲得せんが爲にブル人を相手に起した戰爭である。ロイド、ジョージ思へらく、こは資本家の貪慾を充さんが爲に起されたる無名の師である。世界最大の強國たる英國が、ウエールスの最も小なる二郡ほどの人口を有するに過ぎざる二小國に對し、武力を以て其の要求を強制せん

二小國
トランスヴァール
ウエールス
オレンジ自由國

とするは、非道の甚だしきものである。大英國にとつて最大の寶は、凡ての國の弱き者虐げられ居る者の爲に、其の希望たり楯たる特性即ち是である。こはこの大英國の榮光中最も赫耀たる光彩を放てる寶玉である。南阿の邊境に如何に莫大の金銀を藏すればとて、大英國傳來の此の寶玉と交換せんとするは、無道の極である」と。一八九九年彼は加奈陀に赴く途で開戦の報を耳にするや否や、直に踵を回し、馳せて倫敦に歸り、即時に猛烈なる非戦運動を始めたのである。

國民全體が戦争熱に浮かされて居る眞只中に其等熱狂せる同胞を非難攻撃して、非戦運動を始むるほど世に無謀なる事は無い。彼の友人、彼の同情者、彼の後援者は、擧つて此の無謀なる態度に反対し、折角の人氣を一朝にして失墜せんことを虞れ、是非とも沈黙を守るやうにと切諫した。義を見てせざるは勇なきなり。ロイド、ジョージは勇者である。彼は乃ち罵々たる反対妨害罵詈譏をものともせず、非戦論を提げて全國を遊説せんと決心して、先づ我が選舉區に歸つた。有權者團體は、その極めて不得策なることを主張して已まなかつた。彼は答へていふ、若し諸君にして強ひてしか主張せらるゝならば、余は議員の職を辭するも厭はぬ」と。斯くて第一回の演説は反抗心に充てる聽衆を前にしてカーマーゼンといふ處で催した。當時に於ける彼の

精神は次の一句の中に活躍して居る。

余の見て以て破廉恥と爲すことに對し、余にして若し之に抗議するが爲、この最初の機會は勿論其の他凡ての機會を捉へずして已むならば、余は神及び人の前に立つて自ら一個不忠の卑怯漢たるの感を懷かざるを得ぬであらう。されば余は、今夜も、こゝに敢て抗議する、縦ひ明日からはこのカーマーゼンに一人の友人も無くならうとも。

縦ひ凡ての同胞を敵とするも、不正不義に向つては一步も退かぬと云ふのが彼の精神であつた。彼が猛烈に運動すればするほど、世間の反感も亦益猛烈になる。現に彼の選

舉區の或處で演說會を開いた時などは、彼自身も市街の眞中で袋叩きにされた。かくして彼の不人望は其の頂點に達した時、恰も一九〇〇年の總選舉が行はれた。此の時ばかりは僅かに残つた彼の後援者も殆ど失望したが、流石は英國だ、この國賊この賣國奴は前回に比して五割以上の多數の投票を得て、重ねて再選される事と爲つた。

再選以來、彼は勇氣百倍、縱横無盡に其の奮闘を續けた。翌一九〇一年の十二月には、彼は愈、基督降誕祭の前日を期し、南阿戰爭の直接の責任者たる植民大臣チエンバレンの郷里バトミンガム市に攻入る豫定を立てた。抑この市は、チエンバレンの本營牙城にして、政敵の曾て一步も足を踏入

れることの出来なかつた處である。チエンバレンは早くより親しく同市の市政に參與し、同市をして英國都市中の模範たらしめた恩人で、市民は氏を神の如く崇拜して居るのである。さればロイド、ジョージの此の地に入らんとするの報一たび傳はるや、同地の新聞紙は一齊に筆を揃へて猛烈な攻撃を開始し、自稱國賊來らんとす。賣國奴ロイド、ジョージ侵入せんとす。などいふ挑發的の文字を以て盛に市民の反感を煽動し、廣告隊は終日市中を練り歩いて、國王政府及びチエンバレン君を防衛するが爲め忠實なる凡ての市民はロイド、ジョージの演說會場たる市公會堂に押寄せ、し。なんと觸廻るといふ勢で、彼の未だ來らざるに、殺氣は已

自ら反みて
孟子に見ゆ。

に市内に漲つた。是に於てか警察部長は萬一を慮り、彼に向つて切に集會を中止せんことを求めたけれども、元來彼をオイド、ジョージは自ら反みて縮からずんば、自かからかへりみして止しむるは祖來の習褐寬博と雖も吾惴れざらんや、自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾往かん。いとふ勇者だから、何でふかゝる事にひるむべき、愈、豫定の日、豫定の場所で大演說會を開くことゝ爲つた。そこで當日は警察官は總出となつて公會堂の界限を警戒し、建物の内部にも多勢の警察官が忍んで萬一に備へた。處が此等の準備も凡て無効に歸した。ロイド、ジョージが其の雄姿を演壇に現はすや否や、場内の聽衆は密に携へ來れる各種の飛道具をば演壇目かけて一齊に放射し、場外の群聚も

郡衆心理

亦猛り狂つて、窓を破り扉を押除けて亂入するといふ勢に、流石のロイド、ジョージも一語を發するを得ず、演壇の後方なる一小室に難を避け、警官の制帽制服を借りて變装して、會場を抜け出て、辛くも一命を拾つたのであつた。此の時重傷者二十七名、即死一名、外に警官の重傷者も少くはなかつたといふので、騷擾の如何に甚だしかつたかを知り得ると同時に、平生冷靜沈着なる英人が斯程までの騷動を惹起したといふので、激昂の度の如何に甚だしかつたかをも知るに足るであらう。エヴァンスは彼を評して「ロイド、ジョージ以上の戰鬪的平和主張者は曾て見たことが無い。彼は南阿戰爭當時に於て、ブール人が英軍に反抗して戦ひし

と同じ激しさを以て、戰爭に反抗して戦つた」と言つて居るが、實に其の通だと思ふ。

今や彼は獨逸人の暴虐を懲罰せんが爲、獅子奮迅の勢を以て軍國の大事に當りつゝある。戰鬪的平和主張者たるロイド、ジョージの事開戦後間もなく軍需大臣

となり、次いで陸軍大臣に轉じ、今は總理大臣の椅子を占め、隱然として聯合諸國の總大將たるの觀がある。而も私が見る所では彼は依然として、今より約十五年前、英國バーミンガム市に於て其の同胞の爲に殆ど一命を奪はれようとした當年の戰鬪的平和主張者たるロイド、ジョージそのままの人である。思ふに聽て來るべき平和會議の席上に於て、最も權威ある發言を爲し得る者は、必ずや彼ロイド、ジョ

「ジであらう。而も彼は正義の爲に能く獨逸人と戦ふことを知ると同時に、又能く自國人と争ふことを知る。この故に私は來るべき平和會議の席上に、心より彼を歓迎すると同時に、戦後の經營に於ても、彼の生命のどこしへに長からんことを祈る。國家を異にし、人種を異にしながら、私の私かに其の長壽を祈りつゝあるは、世界の政治家中ロイド、ジョージ唯一人である。(貧乏物語)

二七 岩崎谷

徳富健次郎

淨光明寺を下りて、南洲最期の跡を弔ひに岩崎谷に入る。城山の陰に隠れた塹壕の様に狭い谷である。其の谷の東

岩崎谷
鹿兒島市の西
北城山の中に
ある凹地。
淨光明寺
鹿兒島市内に
あり。岩崎谷
の東北。西郷
隆盛等の墓の
ある處。

今日今日
九月二十四

逸見
逸見十郎太。

別府
別府藩助。

口、もう町へ出ようとする處に、花崗石の石堀で四角に圍つて、南洲翁終焉之地の石碑が建てゝある。三十七年前の今日、今日、天明の頃、狩立てられる熊の如く洞窟の中からのこのこ出て來て、一度ならず最期を促す氣早の逸見を、まだまだと制しつゝ、最期の晴着と、數日前にそつと西別府の留守宅から取寄せた青縞の絹の單衣に、兵兒帶をしめ、素足に新しい草鞋を穿いて谷口指してやつて來る中山の上から亂射する官軍の銃彈に肩から股を貫かれ、彼自身手負であつた別府を呼びかけ、新どん、新どん、もうよかる。と云つて、太つた頸さし伸べて別府に斬らせたは、此の地點であつた。嗚、好い氣もちで魂はあの巨體をはなれたであらう。子供の

月照

京都清水寺の僧。
勤王家。
安政五年(二五二〇)海に投じて死す年四十六。

長井村

日田國東臼杵郡にあり。豊後の國境より南四里可愛嶽の麓にあり。
明治十年八月十七日夜隆盛等潛に官軍の圍を脱して鹿兒島城山に逃る。

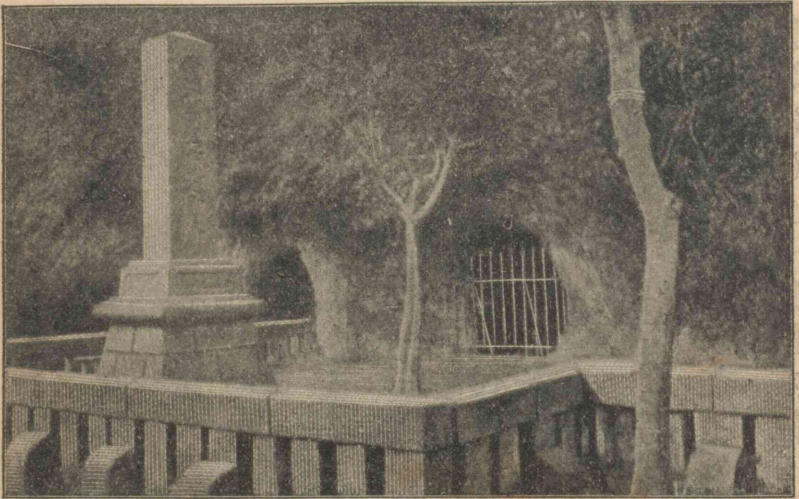
笑儂

百戦無功半歳間、首丘幸得返家山。笑儂向死如仙客。盡日洞中棋響閑。

時喧嘩して相手に脛を切られたが淺傷でのがれ、大島三度の島流しに難船して死にもせず、月照と身投をすれば息吹返して、江戸城受取の前後つけ狙ふ徳川方の弾も刀尖も身に及ばず、朝鮮に死なうと思へば征韓論破れ、果は袋の鼠になつた長井村でさへ死に切れずやつと此處で五十一歳の厄をやうく濟まし得たのを見れば、人間中々死ねないものである。

長井村の谷を何百分の一に縮めた岩崎谷を奥深く進んで、翁が穴居の洞窟に行つて見る。此の前に來た時無かつた鐵柵が洞門をふさいで、中には入れない。これも前には無かつた洞中記念碑が建つて居る。碑の裏に刻した笑儂向

杉聽雨
名は孫七郎。
樞密顧問官。
子爵。



岩崎谷の洞窟

死如仙客盡日洞中棋響閑の七絶は、實は杉聽雨居士の詩ださうな。しばらく碑前に佇む。九月末のまだ夏めいた午前の光が岩崎谷に降り込む。小鳥が鳴いて居る。谷間隠れの人家に機織る響が聞える。洞窟からすこし往くと、谷の行止りに、新しく開鑿した隧道が窅然と口を開いて居る。

二條の鐵軌が、一端を其の隧道に没し、他の一端は洞窟の近くを這ひ、ずうと谷を通つて、終焉記念碑の前から町に出て、鹿兒島停車場に達して居る。此は鹿兒島から市來を経て川内へ通ずる新設の鐵道で、市來までは工事已に落成し、開通式も不日行はれることになつて居るのであつた。斯の悲壯な谷を通じて煤煙の漲るも、こゝ二三日の内である。要するに生きた現代は、刻々歴史を破壊しつゝある。「俺等を攻殺す程に平民の徵兵がなつた」と南洲翁は喜んだと傳へられる。あとくゝと生れて來る者共の爲とあらば、頭の上を踏んで通られても、腹は立てまい、喜ぶであらう。併し我等には少し無慚な氣もちがする。

谷からすゝ山背につけられた路を辿つて城山に上る。公園になつて居る。市街は一目、大隅の遠山かけて櫻島の眺望は言ふに言はれぬ。山上の松樅の大木の中には、三十七年前の強彈の威力を見せて、ぼつきりと梢の折れたのがあつた。それすら、あとから出た枝にまだ盡きぬ生命の程を見せて居る。若木は勿論南國の日を浴びて雨の様な秋蟬の音を降らしながら緑を競つて居る。(死の蔭に)

二八 雨の夜

樋口一葉

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし。今歳はいかなればかくいつまでも丈のひ

樋口一葉
名は夏子。
小説家。
一葉と號す。
明治二十九年
歿す、年二十
六。

くきなど言ひてしを、夏の末つかた極めて暑かりしに、唯一日ふつか三日とも敷へずして、驚くばかりになりぬ。秋風少しそよくとすれば端のかたより果敢なげに破れて風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音なひ、これこそはあはれなれ。細かき雨ははらくと音して、叢がくれ鳴くこほろぎの節をも亂さず。風一しきりさつともてくるは彼の葉にばかりかゝるかと思ひまし。雨は何時もあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。更けゆくまゝに、燈火のかけなどうら淋しく寐られぬ夜なれば、臥床に入らんも詮なしとて小切れ入れたる畳紙とり出し、何とはなしに針をも取られぬ。未だ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる

頃、衽先、褌の形などむつかしう言はれし、いと恥づかしうて、これ習ひ得ざらんほどはと、家に近き某の社に日參といふ事をなしける思へば、それも昔なりけり。をしへし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方もの忘れしつ。かばかしうはえも縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なくあさましく思ふらんなど、打返し其の昔の戀しうて、そぐろに袖もぬれそふ

さかき
あはれぬ
ねの
あまの

縫 口 一 葉 筆 讀 一 葉 全 集

心地す。遠くより音して歩み来るやうなる雨、近き板戸に打ちつけの騒がしさ、何れも淋しからぬかは。老いたる親の瘦せたる肩もむとて骨の手に當りたるも、かゝる夜はいと心細さのやるかたなし。(二葉全集)

二九 佛法僧

高濱 虚子

「雨月物語」を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮べるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞一鳥

高濱虚子
名は清。併人。小説家。明治七年生。

一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々

とあるやうに、其の啼き聲がぶつ、ぼふそうと聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特に持て囃されてゐる。

是に於てか秀吉公の歌といふに、

傳へにし鳥も御法をおこなひの

聲は高野に有明の月。

とかいふのがある。公卿僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽靈を配して「雨月物語」の一章としてゐる。其の物語は趣味ある文字として、嘗て愛誦した事があつた。

夕飯の濟んだ後、今夜奥の院に行つて佛法僧の啼き聲を聞

いて来るから、提燈を貸してくれたまへ。」と給仕の小僧さんにいふと、「畏まりました。」と小僧さんは笑ひながら、膳を下げて行つたが、幾ら待つても來ない。一時間も経つてから、本當に行くのですか。」と聞きに來る。「勿論本當に行くさ。」と答へると、「途中で何か出ますよ。」といふ。「何が出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽霊が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの舊い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽霊位何でもない。」と元氣な事をいつてやる。小僧さんは又薄氣味の悪いいやな笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴（しんぱ）の紋のついてゐる大きな提燈を持つて來る。さうして、「幽霊の外に野衾

も出るさうですから、氣をおつけなさい。若し二時間も経つてお歸りが無かつたら、お迎へに行きます。」と洒落（しやれつ）れた事をいふ。

小僧さん自身に提燈をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう。」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに馬鹿に脊が低い。それが大きな提燈を提げてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ燈がともつてゐるばかりだ。暗やみの中に二三人の小僧さんが笑ひながら、我等を見送つてゐる。其が提燈の光で纔かに見える。

がりくくくと音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくゞり戸を小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖の戸に軋る音であつた。小僧さんが突き出す提燈を受取りながら友と二人で表に出る。表は暗い。星はあるが纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提燈を便りに其の白い土塀に沿うて表通りの奥の院道に出る。

門前の珠數屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖でたて切つた中に帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つて

ゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣がつかなくつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。友は提燈をさし上げて、其の杉の幹に押しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いてもまだ杉の半面を照らし盡さぬ。夜の杉は大ききのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。寐鳥の立つ音がする。見ると、提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高いく杉の梢を彷徨う

てゐる。寐鳥が泡を食ふのも尤だ。歩きながら友に「雨月物語」の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に薄ぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。向ふからふら／＼と提燈が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると「釣狐」

の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい燈が三つともつてゐる。近寄つて見ると御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちら／＼と流れてゐる。燈籠堂はもうすぐ其處に在る筈だが眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すっかり四周の蔀を下して、寂然として寐靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴かであらうと思つて樂みにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。

御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい鈞燈籠がともつてゐる。其の光で纔かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立てとが見える。此の線香立てには晝間見た時は煙が雲の如く渦巻いて居つた。其の煙の中に珠數をくすべたり鈴をくすべたりしてゐた信者が今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つて居らぬ。提燈を其の中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に線香の燃え滓の赤い紙が四五本残骸を留めて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立てだと思つたが、寂然として靜まりかへつた所を見ると、愈偉大な線香立てである。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて、縁に置かれた提燈の燈が心細さうに瞬いてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈だが不思議だと思ふ。其の鉦の音に聽きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたましい鳴き聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の鳴き聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした奴

で、忽ち空中から落下し來つて提燈をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせるか、提燈の燈は一層心細さうに瞬いてゐる。

小さい咳拂ひが聞える。おやと思ふ内、又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りがある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直に番人の部屋と想像がつく。試みに其の傍に行つて、「もし、く」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「一寸伺ひますが、あのおそろしい鳴き聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞くと、「野衾」というて、蝙蝠のやうな、鼬のやうな、

妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが、「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の鳴き聲であつたのは意外であつた。殊に其を聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはり、かんくくくと鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く

響いてから、かんと高い、沓えた音が響く。つまりぶつかん、ぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、「雨月物語」には佛法といふ字にわざ／＼「ぶつばん」と假字が振つてあつて、ぶつばん、ぶつばんと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の鳴き聲はぶつかん／＼と聞えるが、先づ「雨月物語」のぶつばんに近いやうだ。妙なもので初めは鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、これが生き物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のある事に氣がつく。

番人が大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かんのに、今晚は宵の口から頻に鳴いてゐた。といふ。さういふ内も絶えずぶつかん／＼と聞える。普通の鳥とは餘程違つてゐる。法の御山の靈鳥として恥かしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持てはやしたのも尤だ。私は嘗て高野の山の靈山である事は奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々杉は物かは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙か彼方の縁に置かれた提燈の燈も今は靜かにもつてゐる。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をする。どの話も耳新しく面白かつ

たが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいことで、月に一石から二石の間を往來してゐる。殊に三月二十一日の御影供の時は、一日に一石の油を焚くといふ事と、貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる、それを北海道や九州あたりまで持つて歸る中には途中で消えたといふので大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽あらいだんをひしぐやうな鳴き聲ななきこゑをすあひる。歸途に着く。

御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く」といふ。向ふの墓原

を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人に男が一人、南無大師遍照金剛と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

(十五代將軍)

三〇 山の樹

志賀直哉

志賀直哉
文學者
明治十六年生

蟲が恐しかつた。小鳥の嘴が恐しかつた。若芽は延びた。

今度はナイフが恐しかつた。杖を切りに來る人がじろじろと其の邊を見廻しながら通つて行つた。

樹は漸く太くなつた。

小鳥が蟲を探しによく來てとまる。小鳥は愛らしくなつ

た。

然し鉋が恐しい。木こりが通る。あの腰の鉋でぼん／＼と二度たゝかれゝば、自分は胴切りにされる。早く太くならない。

かう思つて居る内に又少し太くなつた。鉋は大して恐しくなくなつた。

然し鋸が恐しい。早く大きくなりた。然し急ぐと危い細い儘で伸びると風に吹折られる。

蟲や小鳥を恐れて居た若芽からは三十年経つた。あと百年経たねば鋸を全く恐れない身分にはなれない。

或日杖を取りに來た男がナイフで自分の肌ハダに August 1915 N.S.

と彫りつけた。消えないやうにと出来るだけ深く彫りつけて行つた。自分は微笑した。然しこんな字が肌に残つて居る内は安心出来ない。此の彫つた人間が年寄になつて死んで、その孫が又年寄になつて、死ぬ時代が來なければ、安心出来ない。出来るだけ地から精分を吸はねばならぬ。出来るだけ太陽の光を受けねばならぬ。而して出来るだけ伸びて、出来るだけ太くならう。百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな嵐に何十度か出會つた。南へ伸び過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸ひに命にかゝはる程の傷は受けなかつた。嵐は憎らしい。自分は大きい

枝を折られた時には随分腹を立てた。然し成長以外一分一厘自身を動かす事の出来ない自分を、その暴力に對し出来るだけ抵抗の少ない姿勢に變へてくれるものは、矢張嵐自身の力だと思ふと、悪意はないと云ふ氣がして、今は憎めなくなつた。兎も角もう安心だ。

官林拂下げの引渡しに役人と願ひ人とが來た。

樹は何だらうと思つて上から見おろして居た。

彼と同年輩の隣の樹が

「何しに來たんだらう。」と彼に聲をかけた。

「小さい樹がびく／＼して居るぢやないか。」

「早く行つて了はないかな。」

「おい／＼君の根つこへ立つて僕を見上げながら何か云つてゐるよ。」

「氣味の悪い奴だな。」

「心配はないよ。」

「おや俺の足を何かでたゝいて居るぞ。」

「うん、鈍で皮をはいで居るんだ。」

「仕様のない奴だな。 オカスト Agis. 2015 かす。」

「矢立を出して何か番號をつけて居る。」

「氣味が悪いなあ。」

「あゝ歩き出した。歩き出した。」

「今晚吹き降りでもあると消してやるんだがなあ。氣持

が悪くて仕様がなない。」

「なに、何でもなないよ。見給へ、大分向ふの方の連中も番號をつけられてるぢやないか。」

「さうだね。だがどうして君はつけられなかつたらう。」

かう云つて隣の樹は羨ましさうに彼を顧みた。一週間経つた。一人の労働者が其の森に入つて來た。暫く其の邊を見廻して、いゝ場所を地ならし始めた。其の邊の小さい樹を鉋で伐り始めた。何所からか熊笹を澤山伐つて來た。而して三日程かゝつて其所に小さな小屋を建てた。又三日程すると石と泥とで上の圓い小屋程のかまを作つた。願ひ人がそれを見に來た。

「俺は此の樹もはひるつもりだつたが、役人の奴は茲までだと言張つた。」

「これかね。」と労働者は呑みさしの煙管の雁首で番號をつけられずに濟んだ彼を指した。彼は其の時何か知らず身震ひを感じた。

「それさ。」

「何わかるもんかね。ついでに伐つて了はうよ。」

「まあ、よせ、それ一本で盜伐で訴へられるとつまらない。」と願ひ人が云つた。

段々に大きな樹が伐り倒されていつた。かまからは晝も夜も烟が立ち登つた。それが立ち登らなくなると二三日

して其の中から眞黒になつたきれぐな樹の死骸が取出された。それは一まとめにされては傍に積み重ねられて行つた。

遂に彼の隣に立つてゐた樹が伐られ出した。それは見た事のない非常に大きな鋸だつた。一間程の長さで、その兩端に柄がついて居た。腰をおろした二人が足を根に踏張りながらそれを挽いた。ずつ／＼と静かに伐り進む。その休みない静かな進行は其の樹の死を一層不可抗なものに思はせた。切り口には三四本の環鐵のはまつた檜の楔が差してある。労働者は時々立つて大きなよきの尻で楔を打込んだ。こうん／＼と云ふ音は山に響き渡

つた。

彼の友は從容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた。

幹は一寸傾きかけた。労働者は起ち上つて静かに其の場を離れた。うめきと共に樹は倒れて行つた。どしんと烈しい地響がした。其の邊の小さい樹や草が煽を受けて一度に靡いた。而して尙暫くはざわ／＼と騒いだ。

それから二週間程すると拂下げられたゞけの樹は炭になり、又あるものは燃し木として少しづつ労働者のために運ばれて行つた。其の邊一帶に廣々と明るくなつた。小さい樹等は不意に日光の直射を受けて歡喜の聲を舉げて騒

いだ。日なたでは暮らせない羊齒類は段々に赤く枯れ始めた。

切株が並んである。彼はそれを眺めながら淋しい氣持になつた。彼には今迄自分のした努力がこれだけで終るものならといふ感情も起つた。最初蟲や小鳥が恐しかつた時代から、ナイフ、鉋、鋸とそれらが一つ／＼恐しいものとして彼の前に現れて來た事を思つた。小鳥を恐れてゐた時にはナイフを知らなかつた事を思つた。而してナイフを知つて恐れ出した時には其の上に鉋のある事は考へなかつた事を思つた。鉋の上には鋸があつた。而して總べてを通過したと思つた時に彼は又更に大鋸といふものゝあ

る事を知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不満もなくなつた。然し彼は過去を顧みて徒勞に歸した其の努力は悔いはしなかつた。徒勞と云ふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のある氣分は今全くなくなつた。而して同時に大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心もなくなつた。それは如何にも淋しかつた。然し其の淋しさの内に彼は或安定を得た。

(白樺の森)

國木田獨歩

名は哲夫。

文學者。

明治四十一年

歿す年三十

八。

三一 非凡なる凡人 その一

國木田獨歩

五六人の年若い者が集つて互に友の上を噂し合つたことがある。その時一人が——僕の子供の時から友に桂正作といふ男があ

る。今年二十四で今は横濱の或會社に技手として雇はれ、専ら電氣事業に従事して居るが、先づ此の男ほど類の異つた人物はあるまいかと思はれる。非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとして偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふが最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど此の男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた處で秀吉とか、ナポレオンとか、其の他の天才に感心するのは違ふので、此の種の人物は千百歳（長）に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産出し得る人物である、又平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖えればそれだけ社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此の意味に於て、ある又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此の故である。

僕等が未だ小學校に通つて居る時分であつた。或日其の日は日曜で僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似をして、我こそ秀吉だとか義経だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働いて大あばれにあれば、遂に喉が渴いて來たので、山のすぐ麓にある桂正作の家の庭へ、裏山からどや／＼と駈下りて、案内も乞はず、いきなり井戸端に集つて我勝にと水を汲んで飲んだ。すると二階の窓から正作が顔を出して此方を見て居る。僕はこれを見るや、「來ないか」と呼んだ。けれども平常にない眞面目くさつた顔つきをして頭を横に振つた。腕白の方でも人並のことをしてのける桂正作、不思議と出て來ないのだ、僕等も強ひては誘はず、其の儘又山に駈登つて了つた。

騒ぎくたびれて皆思ひ／＼に我が家へと歸り去り、僕は一人桂の宅に立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作はテーブルへ向ひ椅子に腰をかけて、一心になつて何か讀んで居る。僕は先づ此

のテーブルと椅子のことから説明しようと思ふ。テーブルといふは粗末な日本机の兩脚の下に繼臺をした品物で、椅子とは足繼の下に箱を置いただけのこと。けれども正作は眞面目で此の工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心してすぐこれだけのことを實行したのである。そして其の後常に此の椅子・テーブルで彼は勉強して居たのである。其のテーブルの上には教科書其他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。で彼は日曜の好い天氣なるにも關らず、何の本か脇目もふらないで讀んで居るので、僕は其の傍に行つて「何を讀んで居るのだ」と言ひながら見ると、洋綴の厚い本である。

「西國立志篇だ」と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ夢の醒めない人のやうで、心は猶書籍の中にあるらしい。

「面白いかね。」

「うん面白い。」

「日本外史と何方が面白い。」と僕が問ふや、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、何時もの元氣のよい聲で、

「それやあ此の方が面白いよ、日本外史とは物が違ふ。昨夜僕は梅田先生の處から借りて來てから讀みはじめたけれど面白うて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ。」と言つて嬉しくつて堪らない風であつた。

其の後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其の本といふは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にばらばらになりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴直した。此の時が僕も桂も數へ年の十四歳。桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此の書を讀んだか知れない。殆ど暗誦するほど熟讀したらしい。そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

げに桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう。桂自身でも

さう言つて居る。

「若し僕が西國立志編を讀まなかつたら、どうであつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお蔭だ。」と。

けれども西國立志編（スマイルスの自助論）を讀んだものは洋の東西を問はず幾百萬人あるか知れないが、桂正作のやうに、余を作りし者は此の書なり。」と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと、桂は中位の人たるに過ぎない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、彼よりも優れた少年は幾らも居た。又彼は可なりの腕白で、僕等と一緒に随分暴れたものである。それで學校に於ても、（村。仲間）郷黨（正直な仲間）に在つても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに抑ふべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふより、敢爲の氣象と言つた方が可からう。則ち一轉すれば冒險心と

なり、再轉すれば山氣となるのである。現に彼の父は山氣のため
に失敗し、彼の兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志
編のお蔭で、此の氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神としたの
である。

兎も角、彼の父は尋常の人ではなかつた。やはり昔の武士で維新
の戰爭にも出て一かどの功をも立てたのである。體格は骨太の
岩乗な作り、其の顔は皆長く切れ、鼻高く一見して堂々たる容貌、氣
象も武人氣質で、容易に物に屈しない。であるから若し武人のま
まで押通したならば、少くとも藩閥の力で今日人は人にも知られた
將軍になつて居たかも知れない。が、彼は維新の戰爭から歸ると
すぐ農の一字に隠れて了つた。隠れたといふよりか出直したの
である。そして殖産といふ流行語にかぶれて遂に破産してしま
つた。

桂家の屋敷は元來町にあつたのを家運の傾くと共に之を小松山

の下に運んで建て直したので、其の時も僕の父などは斯う言つて居た。あれほどの立派な屋敷を打壊さないで、其のまゝ人に譲り其の金で別に建てたら可からうと。けれども、桂正作の父の氣象は此の一事でも解つて居る。小松山の麓に移つてこの方は、純粹の百姓になつて正作の父は働いて居るのを僕は屢見た。であるから正作が西國立志編を読み始めた頃は、其の家政は餘程困難であつたに違ない。けれども其の家庭には何時も多少の山氣が浮動して居たといふ證據には、正作が或日僕に向つて、宅には田中鶴吉の手紙があると得意らしく語つたことがある。其の理由は、桂の父が當時世間で大評判であつた田中鶴吉の小笠原拓殖事業にひどく感服して、わざ／＼書面を送つて田中に敬意を表した處、田中が又すぐ禮狀を出してそれが桂の父に届いたといふ一件。又或日正作が僕に向ひ、今から何ヶ月とかすると蛤を澤山御馳走するといふから、何故だと聞くと、父が蛤の養殖事業を初め、種

開拓殖民

を取寄せて濱に下したから、遠からず此の附近は蛤が非常に採れるやうになると答へた。先づ此等の事で家庭の様子も想像することが出来るのである。父の山氣を露骨に受けついで、正作の兄は十六の歳に家を飛び出し、音信不通、行方知れずになつて了つた。布哇に行つたとも言ひ南米に行つたとも噂せられたが、實際のことは誰も知らなかつた。小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入つて了ひ、暫時故郷をはなれたが、正作は家政の都合でさういふわけにもゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり、月給四圓か五圓かで某町まで二里の道程を朝夕往復することになつた。間もなく冬季休暇になり、僕は歸省の途について故郷近く車で來ると、小さな坂がある。其の麓で車を下り、手荷物を車夫に託し、自分分はステッキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間さきを歩く少年がある。身に古ぼけたトンビを着て手に古ぼけた手提カバン

を持つて、靜かに坂を登りつゝある。其の姿が如何にも桂正作に似て居るので、

「桂君ぢやあないか。」と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのほまさしく正作、立ち止つて僕を待ち、

「冬期休暇になつたのか。」

「どうだ君は未だ銀行に通つてるか。」

「うん、通つてるけれども少しも面白くない。」

「どうしてや？」と僕は驚いて聞いた。

「どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛抱が出来ないだらうと思ふ。第一、僕は銀行業からして僕の目的ぢやないのだから。」

二人は話しながら歩いた、車夫のみ先へやつて、

「何が君の目的だ。」

「工業で身を立つる決心だ。」と言つて正作は微笑し、

「僕は毎日此の道を往復しながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやステヴンソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙つて頷くを見て正作は更に言葉をつぎ、

「だから僕は來春は東京へ出ようかと思つて居る。」

「東京へ。」と驚いて問返した。

「さうさ東京へ。旅費は最早出來たが、彼地へ行つて三月ばかり

食へるだけの金を持つて居なければ困るだらうと思ふ。だから

僕は父に頼んで來年の三月までの給料は全部僕が貰ふことにした。だから四月早々には出立が出来るだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總べて此の筆法である。彼は随分少年に有勝な

空想を描くけれども、計畫を立て、これを實行する上に就いては

少年の時から今日に至るまで、少しも變らず、一定の順序を立て、

一歩々々と實行して遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でも有らうけれども、一つには彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡の人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出来ないが、其の一つを言へば、眞書太閤記三百卷を寫すに十年計畫を立て、遂に見事寫し終つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其の根氣の大いなるに驚いて居る。正作は確に此の祖父の血を受けたに違ない。若しくは此の祖父の感化を受けたらうと思ふ。途上種々の話をして吾々は夕暮に歸宅し、其の後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に將來の大望を語り合つた。休暇が終り、愈僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには、今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだからと。僕も其の積りで正作に別を告げた。明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙を

寄越したけれど、何時も無事を知らずばかりで、別に着京後の様子を告げない。又故郷の者も誰も如何して正作が暮して居るか知らない。父母すら知らない。唯何人も疑はないことが一つあつた。曰く、桂正作は何等かの計畫を立て、其の目的に向つて着々歩を進めて居るだらうといふ事實である。僕は三十年の春上京した。そして宿所が定まるや、早速築地何町何番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此の時二人は已に十九歳。

三三 非凡なる凡人その二

國木田獨歩

午後三時頃であつた、僕は築地何町を隅から隅まで探して、漸くのことて桂の住家を探し當てた。容易に分らぬも道理、某方といふ其の某は車屋の主人ならんとは、とある横町の貧しげな家ばか

り並んで居る中に挟まつて九尺間口の二階屋、其の二階が活ける西國立志編君の巢である。

「桂君といふ人が貴方の處に居りますか。」

「へい、いらつしやいます、あの書生さんでせう。」との山の神の挨拶まじのまじを聞きつけてみしくと二階を下りて来て、「やあ」と現れたのが一別以來三年會はなんだ桂正作である。

足も立てられないやうな汚い疊を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六疊敷煤けた天井低く頭を壓し、疊も黒く壁も黒い。けれども黒くないものがある。それは書籍。

桂ほど書籍を大切にすることは少ない。彼は如何なる書物でも決して机の上や、座敷の真中に放擲するやうなことなどはしない。斯う言ふと桂は書籍ばかりを大切にしているやうだが、必ずしもさうでない。彼は身のまはりのもの總べてを大事にする。

見ると机も可なり立派。書籍箱もさまで黒くない。彼は其の必

要品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美點も悪弊も受けて居ない。今の流行の語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けたゞけに頗るハイカラである。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の、我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例の如く整然として重ねてある。其の他周圍の物總べてが皆其の處を得て、きちんとして居る。

室の不等にして黒く暗澹たるを憂ふるなかれ。桂正作は其の主義と其の性情とに依つて、總べて此等の黒くして暗澹たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。彼は例の如く最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の間ふがまに、上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かした。彼ほど虚榮心の少ない男は珍しい。其の境遇に處し、其の信ずる

所を行つて、それで満足し、安心し、そして勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ、進んで行く。一別以來、正作の爲したることを聞くと實に此の通りである。僕は聞いて居る中にも益彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食ふ男てはなかつた。何が面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任せてまはり歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの翁を見て、彼は直ちにこれと物語り、事情を明して弟子入りを頼み、それより二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢・五厘、時には二錢を投げて貰つて出鱈目を書き、幾錢かつつの収入を得た。或日、彼は客のなき儘に、自分で勝手なこと書いては消し、ワット・ス

テヴンソンなどいふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男兒を連れて衣裳の好い婦人が前に立つた。「ワット」と子供が讀んで、「母様、ワットとは何のこと。」と聞いた。桂は顔を舉げて子供に解り易いやうに此の大發明家の事を話して聞かせ、坊様も大きくなつたら、こんな豪い人におなりなさいよ。」と言つた。さうすると婦人が「失禮ですけれど。」と言ひつゝ、二十錢銀貨を手渡して立ち去つた。

「僕は其の銀貨を使はないでいまだ持つて居る。」と正作は言つて罪のない微笑をもらした。

彼は斯く勞働して居る間、其の宿所は木賃宿、夜は神田の夜學校に行つて、専ら數學を學んで居たのである。

日清の國交が斷絶するや彼はすぐと新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

斯くて其の年も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且問ひ且聞いて居る中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう。」と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く藁口を取出して懐へ入れた。

「何處へ。」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へさ。」と言つて正作は立ちかけたので、

「いや飯なら僕は宿屋へ歸つて食ふから、心配しないほうが可いよ。」

「まあそんなことを言はないで一緒に食ひ給へな。そして今夜は此處に泊り給へ。まだ話が澤山残つて居る。」

僕も其の意に従ひ、二人して車屋を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其の間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなどと言つて居た。けれども僕は桂の生活の模様から察して、三百里外の故郷に往復することの到底、言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸

つて父母を見舞ひ給へ。位の軽い挨拶をして置いた。

「此處だ。」と言つて桂は先に立つて、繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して、暫時ためらつて居ると、内から、

「おい君！」と呼んだ。しかたが無いから入ると、桂は程よき場所に陣取つて笑みを含んで此方を見て居る。見まはすと、桂の外に四五名の勞働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を飲む者、殊の外靜肅である。二人差向ひて卓に倚るや、

「僕は三度々々此處で飯を食ふのだ。」と桂は平氣で言つて、

「君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でも可い、僕は。」

「さうか、それでは。」と桂は女中に向つて二三品命じたが其の名は符牒のやうで僕には解らなかつた。暫くすると、刺身・煮肴・煮汁などが出て、飯を盛つた茶碗に香物。

桂はうまさうに食ひ始めたが、僕は何となくきたならしい氣がし

て食ふ氣にならなかつたのを無理に食ひ始めて居ると、思はず涙が込上げて來た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は否運の底にあれど、要するに彼は紳士の子、それが下層の人と一緒に一膳飯に舌打鳴らすかと思つて涙ぐんだのではない。決してさうではな^いい。いや／＼ながら箸を取つて二口三口食ふや、卒然、僕は思つた。「あゝ此の飯は此の有爲なる勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつある少年が、勞働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をしてくれる好意だ。それを何ぞや、まづさうに食ふとは。桂は此處で三度の食事をするではないか。これをいや／＼ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうか。」と、さう思ふと僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすが／＼しくなつて、桂と共にうまく食事をして、繩暖簾を出た。

其の夜二人で薄い布團と一緒に寢て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや他の友の上のこと

や、將來の望を語り合つたことは、僕今でも思ひ起すと、楽しい懐かしい其の夜の様が眼の先に浮んで來る。

其の後、僕と桂は互に往來して居たが、早くも其の年の夏季休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿屋に來て、

「僕は故郷に歸つて來ようかと思ふ。實は最早決めて居るのだ。」といふ意外な言葉。

「それは可いけれども君……」と僕はすぐ旅費等のことを心配して口を開くと、實は金も出來て居るのだ。三十圓ばかり貯蓄して居るから、往復の旅費と土産物とで二十圓あつたらよからうと思ふ。三十圓悉皆費つて了ふと後で困るからね。」といふのを聞いて、僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると二年前から既に歸省の計畫を立て、其の積りて貯金したのとこと。どうだ諸君、斯ういふことは出來易い様で、なか／＼出來ないこと

だよ。桂は凡人だらう。けれども其の爲すことは非凡ではないか。

此處で僕も大に歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や親戚の女子供を喜ばすべく欣々然として新橋を立つた。

翌三十一年にめでたく學校を卒業し、電氣部の技手として横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。

其の後今日まで五年になる。其の間彼は何をしたか、たゞ其の職分を忠實に勤めたゞけか。さうでない――

彼は大いなる事をして居る。彼の弟が二人あつて、二人とも彼の兄逃亡した兄に似て手に合はない突飛物、一人を五郎と言ひ、一人を荒雄といふ。五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くと、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲に、處々奔走して或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を

逃げ出して了ふ。

それでも正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀ませ、そして工手學校に入れて了つた。僅の給料で自ら食ひ、弟を養ひ、三年間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年に至つて現れ、五郎は技手と成つて、今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に勤勞して居るのである。

荒雄もまた國を飛出した。今は正作と五郎と二人で此の弟の處置に苦心して居る。今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が桂さんは未だ會社です。と言ふから、會社の様子も見たく、其の足で會社を訪うた。

桂の仕事をして居る場所に行つて見ると、僕は電氣の事を詳しく知らないから十分の説明は出來ないが、一本の太い鐵柱を擁して

數人の人が立つて居て、正作は一人其の鐵柱の周圍を幾度となく廻つて熱心に何事かして居る。最早電燈が點いて白晝の如く此の一群の人を照して居る。人々は黙して正作のする處を見て居る。器械に狂ひの生じたのを正作が見分し、修繕して居るのらしい。

桂の顔様子——彼は無人の地に居て、我を忘れ、世界を忘れ身も魂も、今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌、斯くまでに眞面目なるを見たことがない。見て居る中に、一種の莊嚴に打たれた。

諸君——どうか僕の友の爲に、杯を擧げてくれ給へ、彼の將來を祝福して——
(獨歩全集)

師範學校 國文教科書 本科用卷一終

師範學校 國文教科書 本科用卷一附錄

第一篇 假名

一 假名の起原

假名は漢字に基づきて我が國人の工夫したる一種の國字なり。

假名の最も古きは萬葉假名なり。萬葉假名は漢字をそのまま、假り用ひて國語の音を寫すものなり。一に眞假名ともいふ。

漢字は上古三韓と交通せる頃より我が國に傳はりたれど、元來支那語とは全く性質を異にせる國語のことなれば漢字の本來の用法のみを以て國語

萬葉假名

假名

を寫さんとすれば、その不自由甚だしく、或種類の語は全く寫し難きことありしなるべし。是に於て漢字の意義に拘らず、單に漢字の音又は訓を假りて國語を寫さんとするに至るは自然の順序にして萬葉假名の由つて來れる所なり。

古事記日本書記等、奈良時代に出來たる我が邦の最古の歴史にも人名地名乃至歌詞などは漢字の音を假りて、

伊○邪○那○岐○い○さ○な○ぎ○記　素○淺○鳴○す○さ○の○を○紀　吉○備○き○び○記　宇○沙○う○さ○記
夜○久○毛○多○都○伊○豆○毛○夜○幣○賀○岐○やくもたついづもやへがき記
な○と○記○せり都○那○蘇○麻○呂○在○那○賀○賀○岐○久○能○曾○能○在○那○賀○岐○

殊に奈良時代に成れる我が邦の最古の歌集たる萬葉集に至りては、不盡能高嶺爾雪波零家留ふじのたかねにゆきはふりける）天雲毛伊去羽計田萊引物緒あまぐもいゆきはばかりたなびくものを）などの如く漢字の音訓を假り用ひたる處甚だ多し。萬葉假名といふ名ある所以なり。

二 片假名

片假名

片假名は漢字の一片即ち扁旁冠などを取りて國語の音を寫すに用ひたるより起れる名なり。即ち漢字の字畫を省略したる假名なり。

片假名の字體

萬葉假名の工夫によりて國語を記すに便を得て、其の用次第に廣まりゆくに従ひ、隴を得て蜀を望むは人情にや、なほその字畫繁多にして筆寫に時間を費すこと多きを感じるに至れり。是に於て漢字の字畫を省略し或は漢字の略草體を用ひて筆寫を簡捷にせんことをはかれり。

片假名の字體は多くの年月を経て次第に統一せられたるものにて、古き文書によれば初めのほどは種々の省略を試みたること明かなり。例へば、

阿　　𐄂𐄃𐄄
伊　　𐄅𐄆𐄇
字　　𐄈𐄉𐄊

省文 江 江エ

於 於をオオ

の如く種々に變遷したるを見るべし。従つて吉備眞備が片假名を製作せりといふ説は從ひ難し。

五十音圖は國語の音を類別して十行五段に排列したる圖なり。今之を左に掲げ併せて片假名の字原を注記す。

五十音圖

マ末	ハ八	ナ奈	タ多	サ散	カ加	ア阿
ミ三	ヒ比	ニ二	チ千	シ之	キ幾	イ伊
ム牟	フ不	ヌ奴	ツ川	ス須	ク久	ウ宇
メ女	ヘ部	ネ禰	テ天	セ世	ケ介	エ江
モ毛	ホ保	ノ乃	ト止	ソ曾	コ己	オ於

全々

椽

片假名の字原は前に示せるが如し。されどケツヘエなどの字原につきては尙異説なきにあらず。

片假名は漢字の一片を取れるが常なれど中には千八三二の如く簡單なる原字をそのまま用ひて省文せざるものあり。

片假名の字原は多く字音を用ひたり。されど中には江千三女の如く字訓を用ひたるもあり。

片假名の字形は今日にては大抵一定し別體としては只ネを子、キを井と書くことあるに過ぎず。

五十音の外、撥音を寫す片假名にシの字後に出來たり。

五十音圖は奈良時代には未だあらず。支那より傳へたる悉曇に倣ひて平安時代の初期に或僧徒の作れるものなるべし。従つて五十音を吉備眞備の作なりといふ説は誤なり。

五十音圖は音の性質によりて排列したるものゆる國語を研究するには極めて必要なるものなり。
國語の辭書の排列も近來は多く五十音圖の順序に據るもの多し。是排列の學術的なるのみならず實際使用上に便利なるものあればなり。故にこの音圖は縦にも横にも自由に誦誦し得るやうに習熟しおかんことを要す。

三 平假名

平假名は漢字を平たくつゞげ書きにして國語の音を寫すに用ひたるより起れる名なり。之を草假名ともいふは漢字の草體によれる假名の意なり。

片假名は概して漢字の楷體の省文なるが平假名は漢字の草體の略體なり。平假名の字體も一時に一定したるものにあらず種々の略體行はれて次第に統一せられたるものなり 例へば

以 以 以 以 以 以

平假名

平假名(字體)

呂 呂 呂 呂 呂 呂
波 波 波 波 波 波

の如し。従つてこの平假名を空海の作れりといふは誤なり。

いろは歌は國語四十七音を用ひて作れる今様歌なり。七五調四句より成れり。但し第二句は六五の句なり。今之を左に掲げ併せて平假名の字原を注記す。

いろは歌

い	以	ろ	呂	は	波	に	仁	ほ	保	へ	部	と	止
ち	知	り	利	ぬ	奴	る	留	を	遠				
わ	和	か	加	よ	與	た	太	れ	禮	そ	曾		
つ	川	ね	禰	な	奈	ら	良	む	武				
う	宇	み	爲	の	乃	お	於	く	久	や	也	ま	末
け	計	ふ	不	こ	己	え	衣	て	天				

いろは歌

あ	安	さ	左	き	幾	ゆ	由	め	女	み	美	し	之
ゑ	惠	ひ	比	も	毛	せ	世	す	寸				

いろは歌の意は

色は匂へど散りぬるを、

諸行無常

我が世誰ぞ常ならむ。

是生滅法

有爲の奥山今日超えて、

生滅滅已

浅き夢見じ酔ひもせず。

寂滅爲樂

にて佛教の極意を述べたるものなりといふ。

いろは歌は従來手習の手法に用ひられ従つて世間に多く通用せるものゆゑこれを誦しおくべし。且學術的には五十音圖多く用ひられるれと俗間にはいろは歌を以て順序を次第すること今も多ければかた／＼これに習熟し置くをよしとす。

平假名の原字は大抵字音にとれり。たゞ女部の二字は字訓を用ひたり。但しつへ二字の字原は未だ定説を得ず。

平假名の字體はみな全體の略草なれど唯への部に於けるのみは部の字の

變體假名

旁下の第一畫を取れるにてまづは省文なり。この外に撥音を寫す平假名んの字後に出來たり。平假名の別體に變體假名と稱するものあり。今その重なるものを掲げ且その字原を注記す。

變體假名表

以	逸路	え者	ハ	八志盤	一丹	ふ爾	了耳
何保	不本	登遍	登登	登登			
お知	お里	お利	お怒	る留	依流	茂越	
こ王	可	の可	と興	さ太	多	堂	也連
整楚	う會						
川	流徒	津津	絲彌	年	奈那	那	良羅
字	宇	井	乃	乃	比能	ね於	く久
末	万	満	満				屋

合字

變體假名は字形多くは複雑なるか又は他と紛れ易きかの缺點あれば今日
は多く之を用ひず。されど古き版本又は歌句などには之を用ひたるが
り。

又筆記の便利を圖るため假名ニ一字を合せて一字とせるも
の起れり。これを合字といふ。

トコト 片トモ 片トキ
トこと 片より

合字は成るべく用ひざるを可とすれど若し之を用ふるときは片假名平假
名を混用することあるべからず。而してトとは事、片は雖、片は時々は自の

レ介多希 婦婦多布 古 江江 天
安阿阿 左佐 起 自由 免 三
之志志
惠 比 毛 世勢 春須勢壽

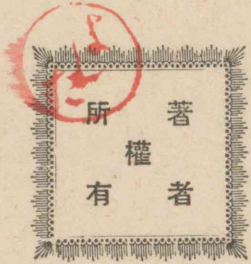
意味に限りて用ふべく、従つて一種の意味を有することとなりて假名の本
質を失へるものゝ如し。

又也の意味に之の字を用ふるは也の草體の省文にして爲而の意味に之の
字を用ふるは爲の省文なり。これも強ひて用ひざるを可とす。

大正十一年	明治三十四年	明治三十七年	明治三十六年	明治三十八年
十月二十二日	十月九日	十月廿九日	十月廿九日	十月廿九日
發行	發行	發行	發行	發行
修正	修正	修正	修正	修正
十月二十二日	十月九日	十月廿九日	十月廿九日	十月廿九日
發行	發行	發行	發行	發行
修正	修正	修正	修正	修正
十月二十一日	十月八日	十月廿八日	十月廿八日	十月廿八日
發行	發行	發行	發行	發行
修正	修正	修正	修正	修正
十月二十一日	十月八日	十月廿八日	十月廿八日	十月廿八日
發行	發行	發行	發行	發行

卷二	卷三	卷四
金五拾錢	金四拾錢	金四拾錢
金八拾錢	金七拾九錢	金七拾二錢
金九拾錢	金八拾九錢	金七拾九錢

定價
三年度臨時定價



編者 吉田彌平
 發行者 上原才一郎
 發行所 光風館書店
 印刷者 四海民藏

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

東京市神田區通神保町六番地
 (電話) 神田三〇八七番
 (振替口座) 東京三二七番

三原女子師範学校
送部生 松野琴
少年



広島大学図書

2000065471



4
71